K－543

米沢市埋蔵文化財調査報告書　第47集

遺跡詳細分布調査報告書

第 8 集

住宅開発関係の分布調査
上窪遺跡の発掘調査
生蓮寺遺跡の発掘調査
西明寺遺跡の発掘調査
金ヶ崎a遺跡の確認調査
大壇遺跡の確認調査
杢代遺跡の確認調査
上谷地b遺跡の確認調査
我妻館跡の発掘調査
上杉家墓所の確認調査

平成7年3月
1995

米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財調査報告書　第47集

遺跡詳細分布調査報告書

第 8 集

住宅開発関係の分布調査
上窪遺跡の発掘調査
生蓮寺遺跡の発掘調査
西明寺遺跡の発掘調査
金ヶ崎a遺跡の確認調査
大壇遺跡の確認調査
杢代遺跡の確認調査
上谷地b遺跡の確認調査
我妻館跡の発掘調査
上杉家墓所の確認調査

平成7年3月

1995

米沢市教育委員会

序　　文

本報告書は、米沢市教育委員会が平成６年度に文化庁の補助を受けて実施した、「遺跡詳細分布調査」の結果をまとめたものです。

本市教育委員会は、遺跡詳細分布調査を昭和62年度から本年度まで、８年間継続して実施しております。調査を重ねることにより、新規遺跡の発見や埋蔵文化財の所在、範囲および性格等の解明が進んでいるところであります。

近年、本市においても大規模な開発事業計画が増加しており、本市教育委員会は、埋蔵文化財保護の立場から、開発事業者等との調整を円滑に行うため、本調査事業には可能な限り力を注いでおります。また、発掘調査における現地説明会、埋蔵文化財展の開催等によって、市民の文化財に対する意識の高揚に最大限の努力をしております。

このたびの遺跡詳細分布調査では、開発行為に係わる発掘調査を６件実施しました。縄文時代の遺跡が大半を占めます。

最後になりましたが、調査にあたって数多くのご指導、ご協力を賜わりました文化庁、及び山形県教育庁文化財課をはじめ、地権者各位、地元の皆様に対し、衷心よりお礼を申し上げます。

平成７年３月

米沢市教育委員会
教育長　相　田　　實

例　　言

1　本報告書は、文化庁の国庫補助を受けて実施した、平成６年度の埋蔵文化財調査報告書第47集（遺跡詳細分布調査報告書第８集）である。

2　調査は米沢市教育委員会が実施したものである。

3　調査体制は下記のとおりである。

調査主体　米沢市教育委員会
調査総括　舟山豊弘（文化課長）
調査担当　手塚　孝
調査主任　菊地政信・月山隆弘
作 業 員　遠藤忠一、松本三郎、平野洋子、小浦文吉、前山慶一、黒沢富雄、井上吉栄、高橋　実、黒沢栄美子、武田房次郎、佐藤弘則、赤木よし子、菊地政治、黒田よし子、工藤智恵子、小関晴雄、小関ち江、高橋美香、菊地芳子、石井よそ子、中島国雄
事務局長　我妻淳一
調査指導　文化庁、山形県教育庁文化財課

4　挿図の縮尺は、各挿図にスケールで示した。挿図内の記号は、黒丸・ー試掘箇所及び出土遺物地点、ＤＹ－土壙、ＴＹ－柱穴、ＰＹ－ピット、ＡＺ－土器、ＢＺ－石器、ＫＹ－溝を示している。詳細は、米沢市埋蔵文化財報告書第15集を参考されたい。

5　各遺跡の出土遺物は、米沢市埋蔵文化財課資料室に一括保存している。

6　本書の作成は月山隆弘（第１・９節）、菊地政信（第２～８、10節）が行った。責任校正は、我妻淳一が行い、全体について手塚　孝が総括した。

7　調査にあたって、安部三十郎・安部　登・雨田孝英・釜田恵治・水野　哲・我妻新七及び関係各位の協力を得た。記して感謝申し上げます。

本　文　目　次

序文
例言
第１節　平成６年度住宅開発等に伴う埋蔵文化財調査経過
Ⅰ　住宅開発等に係わる遺跡の確認 …… 1
Ⅱ　試掘調査状況 …… 3

第２節　上窪遺跡
Ⅰ　遺跡の概要 …… 10
Ⅱ　調査の経過 …… 10
Ⅲ　検出遺構 …… 15
Ⅳ　出土遺物 …… 15
Ⅴ　まとめ …… 17

第３節　生蓮寺遺跡
Ⅰ　遺跡の概要 …… 18
Ⅱ　調査の経過 …… 18
Ⅲ　検出遺構 …… 22
Ⅳ　出土遺物 …… 22
Ⅴ　まとめ …… 22

第４節　西明寺遺跡
Ⅰ　遺跡の概要 …… 23
Ⅱ　調査の経過 …… 23
Ⅲ　検出遺構 …… 26
Ⅳ　出土遺物 …… 26
Ⅴ　まとめ …… 33

第５節　金ケ崎ａ遺跡
Ⅰ　遺跡の概要 …… 34
Ⅱ　調査の経過 …… 34

第６節　大檀遺跡
Ⅰ　遺跡の概要 …… 36
Ⅱ　調査の経過 …… 36

第７節　杢代遺跡
Ⅰ　遺跡の概要 …… 38
Ⅱ　調査の経過 …… 38

第８節　上谷地ｂ遺跡
Ⅰ　遺跡の概要 …… 40
Ⅱ　調査の経過 …… 44
Ⅲ　検出遺構 …… 44
Ⅳ　出土遺物 …… 48
Ⅴ　まとめ …… 57

第９節　我妻館跡
Ⅰ　遺跡の概要 …… 60
Ⅱ　調査の経過 …… 60
Ⅲ　検出遺構 …… 62
Ⅳ　まとめ …… 62

第10節　史跡米沢蕃主上杉家墓所
Ⅰ　遺跡の概要 …… 65
Ⅱ　調査の経過 …… 65

参考文献 …… 66

挿　図　目　次

第１図米沢城跡位置図 …… 3
第２図台坂遺跡位置図 …… 4
第３図花沢ａ・ｂ遺跡位置図 …… 4
第４図花沢ｂ遺跡位置図 …… 4
第５図通町遺跡位置図 …… 5
第６図松原遺跡位置図 …… 5
第７図石垣町遺跡位置図 …… 5
第８図上谷地ｂ遺跡位置図 …… 6
第９図八木橋ｂ遺跡位置図 …… 6
第10図大壇遺跡位置図 …… 6
第11図東屋敷遺跡位置図 …… 7
第12図荒屋敷遺跡位置図 …… 7
第13図台ノ上遺跡位置図 …… 7
第14図大代原遺跡位置図 …… 8
第15図下ノ町ｂ遺跡位置図 …… 8
第16図小野川ａ遺跡位置図 …… 8
第17図上新田Ｃ遺跡位置図 …… 9
第18図大浦Ａ・Ｂ遺跡位置図 …… 9
第19図馳上ｂ遺跡位置図 …… 9
第20図上窪遺跡位置図 …… 11
第21図上窪遺跡発掘調査地点図 …… 12
第22図上窪遺跡遺構全体図 …… 13
第23図上窪遺跡出土土器実測図 …… 14
第24図上窪遺跡出土土器拓影図、石器実測図 …… 16
第25図生蓮寺遺跡位置図 …… 19
第26図生蓮寺遺跡出土石器実測図 …… 20
第27図生蓮寺遺跡３次調査遺構全体図 …… 21
第28図西明寺遺跡位置図 …… 24
第29図西明寺遺跡全体図 …… 25
第30図西明寺遺跡の土器拓影図（１） …… 27

第31図西明寺遺跡の土器拓影図（２） …… 28
第32図西明寺遺跡出土石器実測図（１） …… 30
第33図西明寺遺跡出土石器実測図（２） …… 31
第34図西明寺遺跡出土の礫器実測図 …… 32
第35図金ケ崎ａ遺跡位置図 …… 35
第36図大壇遺跡位置図 …… 37
第37図杢代遺跡位置図 …… 39
第38図上谷地ｂ遺跡位置図 …… 41
第39図上谷地館略測図 …… 43
第40図上谷地ｂ遺跡遺構全体図 …… 45・46
第41図上谷地ｂ遺跡ＫＹ３平面図 …… 49・50
第42図上谷地ｂ遺跡出土土器拓影図（１） …… 51
第43図上谷地ｂ遺跡出土土器拓影図（２） …… 52
第44図上谷地ｂ遺跡出土遺物実測図 …… 53
第45図上谷地ｂ遺跡出土丸木弓実測図 …… 54
第46図米沢市東方の主要館跡位置図 …… 56
第47図米沢市東方の主要館跡略測図 …… 59
第48図我妻館遺跡位置図 …… 61
第49図我妻館遺跡遺構全体図 …… 62
第50図上杉家墓所位置図 …… 64

図　版　目　次

第一図版　上窪遺跡出土遺物
第二図版　上窪遺跡出土遺跡
第三図版　上窪遺跡出土遺跡
第四図版　上窪遺跡　発掘前の風景　発掘風景
第五図版　上窪遺跡　ＣＹ１　ＡＺ２出土状況　ＣＹ１　完掘状況
第六図版　上窪遺跡　ＡＺ３　出土状況　調査区全景
第七図版　生蓮寺跡
第八図版　生蓮寺遺跡　調査全景
第九図版　西明寺遺跡出土遺物
第十図版　西明寺遺跡出土遺物
第十一図版　西明寺遺跡出土遺物
第十二図版　西明寺遺跡出土遺物
第十三図版　西明寺遺跡　調査風景　調査全景
第十四図版　金ケ崎の遺跡　試掘箇所遠景　試掘箇所近景
第十五図版　大檀遺跡　試掘箇所近　南トレンチ
第十六図版　大檀遺跡　重機による表土剥離状況　トレンチセクション状況
第十七図版　杢代遺跡　試掘箇所遠景　試掘箇所近景
第十八図版　上谷地ｂ遺跡出土遺物
第十九図版　上谷地ｂ遺跡出土遺物
第二十図版　上谷地ｂ遺跡出土遺物
第二十一図版　上谷地ｂ遺跡出土遺物
第二十二図版　上谷地ｂ遺跡出土遺物
第二十三図版　上谷地ｂ遺跡出土遺物
第二十四図版　上谷地ｂ遺跡　調査区全景　ＫＹ３掘り下げ状況
第二十五図版　上谷地ｂ遺跡　ＫＹ３完掘状況　ＫＹ３礫出土状況
第二十六図版　上谷地ｂ遺跡　ＫＹ３セクション状況　ＫＹ２セクション状況
第二十七図版　我妻館跡　掘跡近景　土塁近景
第二十八図版　上杉家墓所　調査区近景　調査風景

第１節　平成６年度　住宅開発等に伴う埋蔵文化財調査経過

Ⅰ　住宅開発等に係る遺跡の確認

今年度、本市教育委員会に住宅開発などによって埋蔵文化財に係りあると思われるため、協議や試掘などの確認依頼を受けたものは３月31日で97件であった。その内訳は下記のとおりである。

１	住宅建設に係るもの	58件	２	土木工事に係るもの	３件
３	店舗などに係るもの	11件	４	大規模土地開発に係るもの	９件
５	工場・倉庫などに係るもの	７件	６	公共施設に係るもの	５件
７	その他開発行為に係るもの	４件			

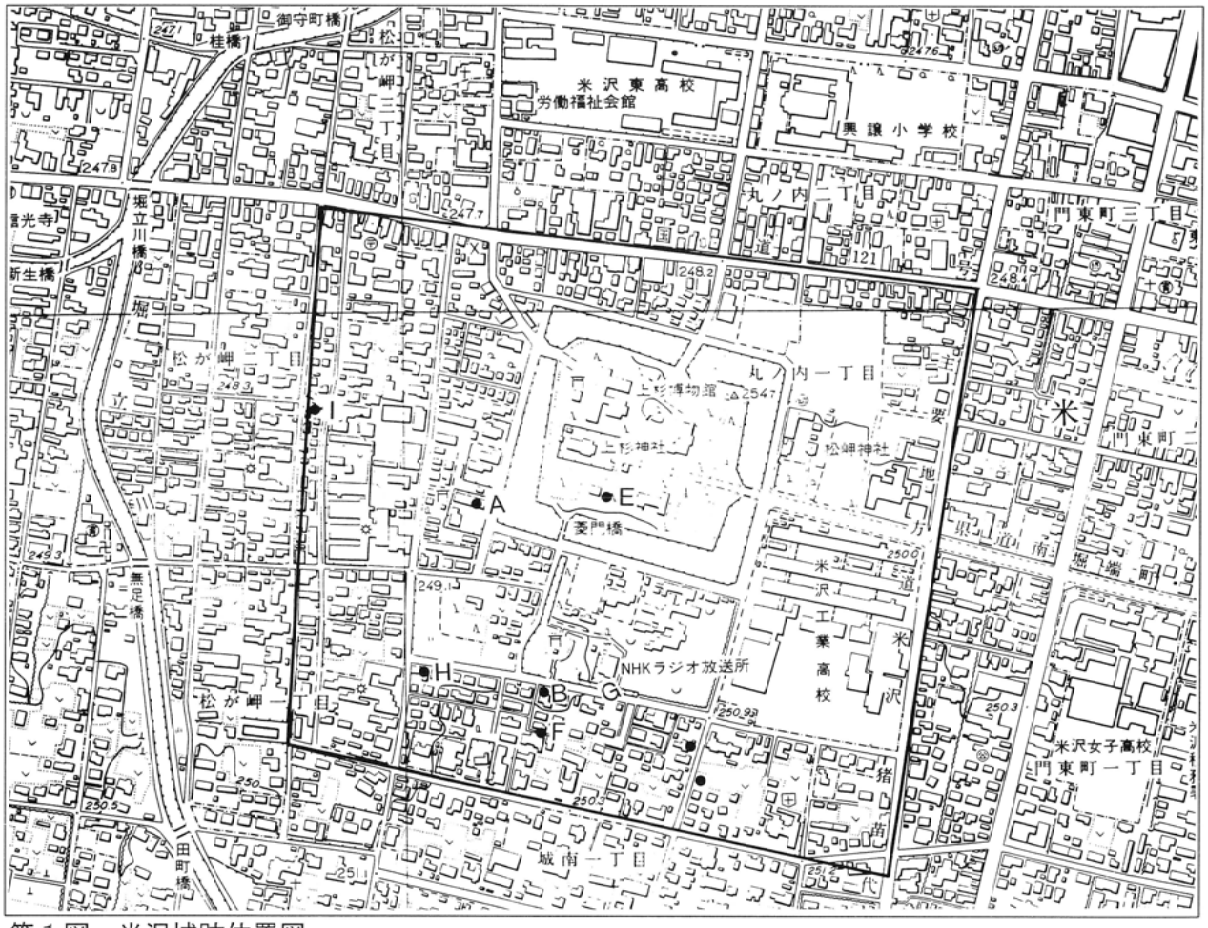
以上のように、今年度の調査依頼の例年同様、住宅建設に係るものが大半を占めている。遺跡細分布調査をはじめて今年度で８年目を向かえており、過去の確認依頼を振り返ってみると、年を追うごとに増加傾向をしめている。このことは発掘調査現地説明会、埋蔵文化財展など文化財に対する啓蒙活動を進めていることから文化財保護の認識が広く市民に浸透したためと考えられる。

今年度は宅地造成に伴うものに加え、大規模な土地開発（宅地造成）の増加が顕著であった。今年度の97件の確認申請及び確認依頼での調査内容を区分けすると、遺跡地図で確認したのみのもの（包蔵地外）９件、現地立会い調査６件、ボーリング調査10件、試掘調査（トレンチ・グリット調査）72件である。

これらの試掘調査によって、遺構の形跡や遺物などが確認されたため遺跡詳細分布調査で発掘調査を実施したのは、万世地区の上窪（縄文）・杢代（縄文）・上谷地ｂ（縄文・中世）・我妻館（中世）、上郷地区の金ケ崎（縄文）、御廟地区の上杉家所墓所（近世）、館山・遠山地区の生蓮寺（縄文・中世）・西明寺（縄文）、南原地区の大壇（縄文）野９遺跡である。今回の発掘調査で注目される遺跡として上谷地ｂ遺跡がある。昭和60年に漆塗の丸木弓と土製環状耳飾が出土している遺跡で、この周辺一帯は進められている高校の建設や各種開発が予定されている所で、今後の開発計画との調整を図りながら調査が進ことによって、より一層解明されるものと思われる。　以下、発掘調査に至らなかった箇所で試掘調査を実施した箇所について表１にまとめ、順次、位置図を加えその調査結果について概述する。表１に関しては平成７年３月７日現在を記入した。

表１

No.	遺跡名	調査箇所	調査月日	開発の種別	調査内容	備考
1	台坂	下花沢三丁目1729－１　1731－１	４月５日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
2	東屋敷	大字竹井字野際900－１	５月10日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
3	東屋敷	大字竹井字野際899－１	５月10日	宅地(倉庫)	グリット	１×２ｍ　１箇所
4	石垣町	大字笹野字石垣町尻参97	５月10日	宅地	グリット	１×１ｍ　３箇所
5	台坂	下花沢三丁目1441－４	５月31日	宅地	グリット	１×２ｍ　２箇所
6	小野川町ａ	小野川町字突坂1788他	６月１日	宅地	グリット	１×１ｍ　３箇所
7	大浦Ｂ	中田町12－７　12－８　12－14	６月２日	レンタルビデオ	グリット	１×２ｍ　２箇所
8	下之町Ｂ	大字口田沢字沢田１－918－６	６月10日	宅地	グリット	１×２ｍ　２箇所
9	大台原	大字簗沢3522－１	６月13日	宅地	トレンチ	１×８ｍ　３箇所
10	下花沢	東大通三丁目３－43	６月17日	宅地(倉庫)	グリット	１×２ｍ　２箇所
11	上谷地ｂ	大字川井553	６月27日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
12	花沢Ａ	花沢一丁目2533－２	７月12日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
13	上新田	大字上新田156	７月14日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
14	松原	大字三沢白旗十一2610－５	７月15日	事務所	グリット	１×１ｍ　２箇所
15	米沢城	丸ノ内一丁目4751－19	７月15日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
16	通町	通町七丁目8767－２	８月５日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
17	荒屋	大字長手字弓町1812－２	８月12日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
18	米沢城	丸の内一丁目	９月５日	掘浚業工事	トレンチ	２×36ｍ　１箇所
19	米沢城	丸の内一丁目36	９月12日	社務所	トレンチ	１×２ｍ　６箇所
20	台坂	下花沢三丁目1762－１他	９月14日	宅地	トレンチ	１×２ｍ　２箇所
21	台坂	下花沢三丁目1760－１他	９月14日	宅地	トレンチ	１×１ｍ　２箇所
22	下花沢ｂ	下花沢7640－３	10月12日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
23	花沢ｂ	駅前四丁目2462－１	10月12日	宅地	グリット	２×２ｍ　１箇所
24	台坂	下花沢二丁目1846	10月19日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
25	荒屋	大字竹井1657－１	10月26日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
26	花沢ａ	花沢町一丁目2663－７	11月８日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
27	台坂	下花沢二丁目1639－12他	11月15日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
28	八木橋ｂ	大字花沢八木橋南上3198－７他	12月９日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
29	大浦Ａ	中田町12－15他	12月13日	宅地	トレンチ	１×４ｍ　２箇所
30	馳上ｂ	大字川井字元立1108－３	12月27日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
31	台坂	下花沢二丁目１－41	12月12日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
32	下花沢ｂ	東大通三丁目	１月20日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
33	米沢城	城南一丁目７－14	２月23日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所
34	米沢城	城南一丁目地内	２月24日	土木工事	グリット	１×10ｍ　１箇所
35	米沢城	城南一丁目８－６他	３月７日	宅地	グリット	１×１ｍ　２箇所



第１図　米沢城跡位置図

Ⅱ　試掘調査状況

１）米沢城跡

本遺跡は、市街地松ケ岬公園一帯に位置する。二の丸と三の丸の一部を含め、東西600m×南北560mあり、市街地では最大の範囲を有す。

今年度は開発事業に伴って調査依頼を受けたのは一番多い９件あった。その内訳は個人住宅の新改築に係るもの６件、事務所併用住宅に係るもの１件、土木工事（公共事業）に係るもの２件である。

Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｈ・Ｉは個人住宅の新築であった。Ａ・Ｉは西二の丸、Ｂは本丸、Ｃ・Ｄ・Ｈは南二の丸にあたる。Ｅは本丸に当たり、事務所併用住宅に係るものである。適宜開発面積に応じて試掘坑を設定した。表土下50～80cmにて遺構確認面が認められた。いずれも遺構確認面までの土層は１～３層になっており３層には焼土・炭化物が混入している整地層であった。Ｆは道路整備に伴う側溝新設工事であった。Ｇは南二の丸に当たり、堀の浚渫工事であり立会い調査を実施した。遺構や遺物は確認されなかったため慎重工事を指示した。

２）　台坂遺跡

本遺跡は市街地を流れる松川の段丘上に位置し、ＪＲ米沢駅北東約100mに所在する。遺跡範囲は東西約400m×南北約700mあり、市街地では米沢城跡に次ぐ広範囲に分布している。

本遺跡の申請はＡ～Ｄの４件あり、全て個人住宅の新築に伴うものである。概ね１m×２mの試掘坑を２箇所設定した。全体では表土下50～60cmにて遺構確認面が認められたが、いずれも遺構や遺物の痕跡は認められなかったことから慎重工事を指示した。

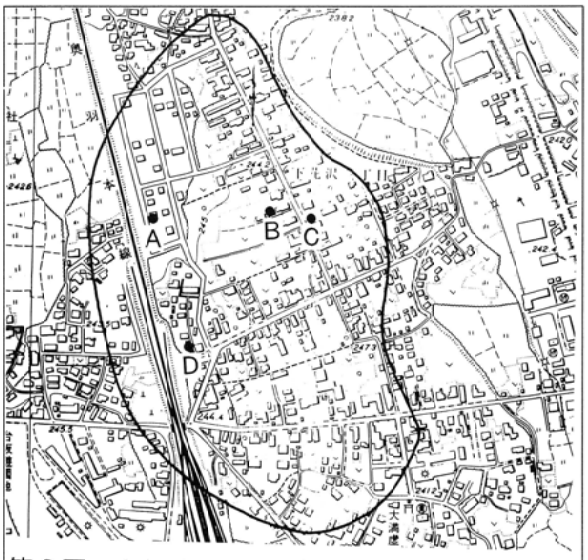
３）　花沢ａ・ｂ遺跡

花沢ａ遺跡は昭和62年に実施した確認調査において、縄文中期の複式炉を伴う竪穴住居跡などが確認された所である。両遺跡ともに申請は個人住宅の新築に伴うものである。花沢ａは１m×１m、花沢ｂは２m×２mの試掘坑をそれぞれ２箇所設定した。表土下30～50cmにて遺構確認面が認められたが、いずれも遺構や遺物の痕跡は認められなかったことから慎重工事を指示した。

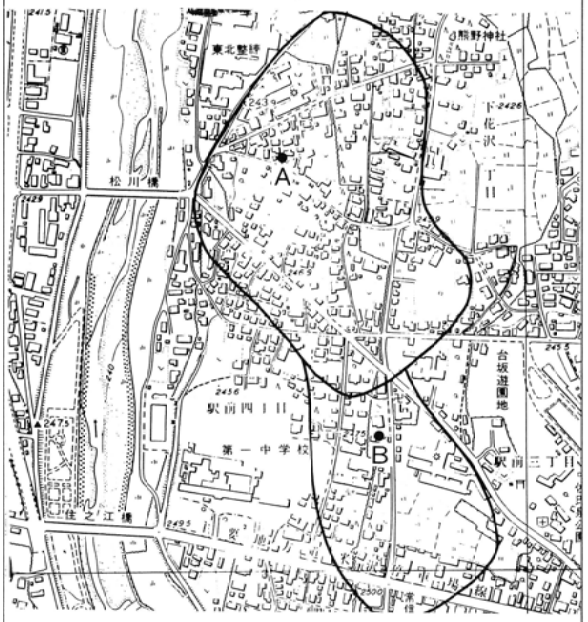
４）　下花沢ｂ遺跡

申請はＡが車庫新築、Ｂは共同住宅に伴うものである。１m×１m、４m×４mの試掘坑をそれぞれ２箇所設定した。表土下40cmにて遺構確認面が認められたが、いずれも遺構や遺物の痕跡は認められなかったことから慎重工事を指示した。

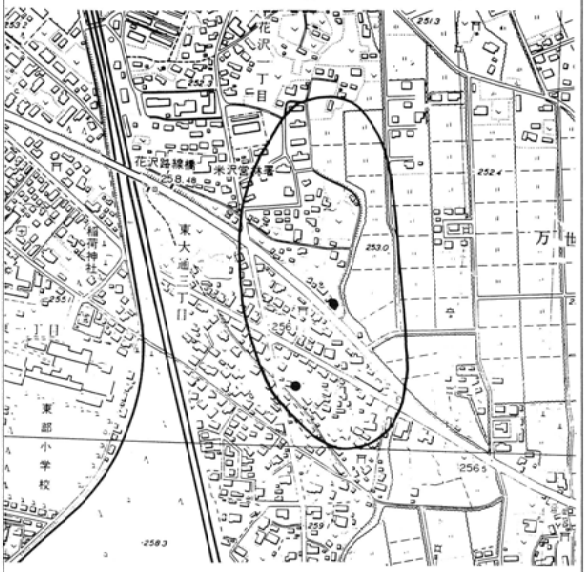
５）　通町遺跡



第２図　台坂遺跡位置図



第３図　花沢ａ・ｂ遺跡位置図


第４図　下花沢ｂ遺跡位置図

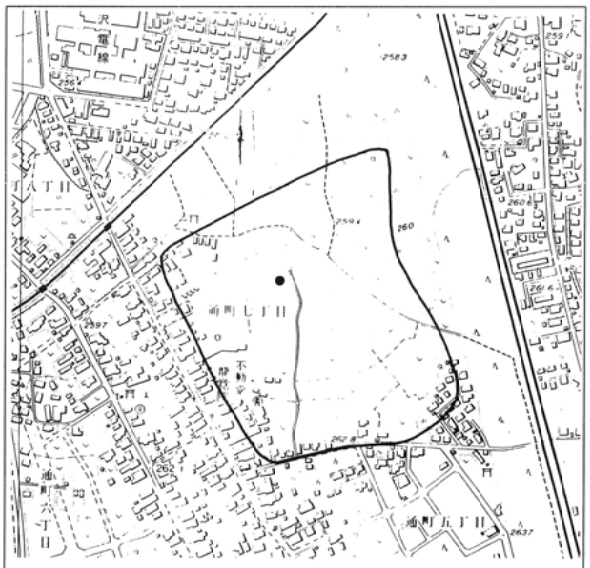
本遺跡は縄文中世の遺跡として登録されている。申請は個人住宅の新築に伴うものである。１ｍ×１ｍの試掘坑を２箇所設定した。表土下50㎝にて暗褐色の良好な地山層が認められたが、遺構や遺物の痕跡は認められなかった。遺跡範囲の中心部にもあたることから慎重工事で進めるよう指示した。

６）　松原遺跡

本遺跡はＪＲ米沢駅南東約３㎞に位置し、縄文時代（前期・中期）に属している。本市において一ノ坂・花沢Ａ・窪平遺跡と同様、縄文前期として注目される遺跡である。申請は事務所の新築に伴うものである。１ｍ×１ｍの試掘坑を２箇所設定した。表土下50㎝にて地山層が認められたが、遺構や遺物の痕跡は認められなかった。遺跡範囲の際い南東側にもあたる所から遺跡は存在しないと判断した。しかし念のため慎重工事を指示した。

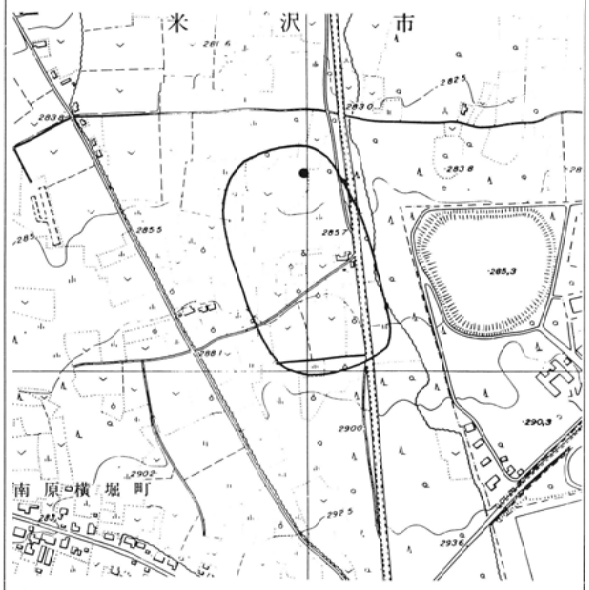
７）　石垣町遺跡

申請は個人住宅の新築に伴うものである。１ｍ×１ｍの試掘坑を３箇所設定した。表土下50㎝にて地山層が認められたが、遺構や遺物の痕跡は認められなかった。遺跡範囲の際い北側にもあたる所から遺跡は存在しないと判断した。しかし念のため慎重工事を指示した。



第５図　通町遺跡位置

第６図　松原遺跡位置図



第７図　石垣町遺跡位置図

8）　上谷地ｂ遺跡

本遺跡付近は、大規模な開発が予想される所である。今年度発掘調査を実施した箇所から南北に当たる。

申請は個人住宅の新築に伴うものである。１ｍ×１ｍの試掘坑を２箇所設定した。表土下40cmにて地山層が認められたが、遺構や遺物の痕跡は認められなかった。慎重工事で進めるよう指示した。

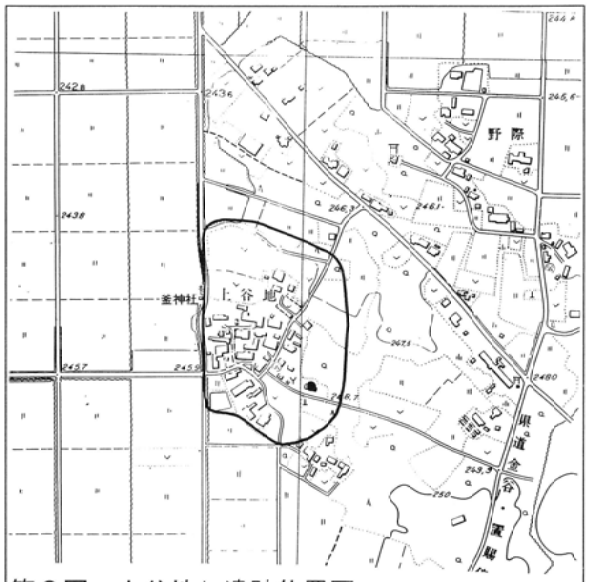
9）　八木橋ｂ遺跡

申請は個人住宅の新築に伴うものである。１ｍ×１ｍの試掘坑を２箇所設定した。表土下50cmにて地山層が認められたが、遺構や遺物の痕跡は認められなかった。念のため慎重工事で進めるよう指示した。

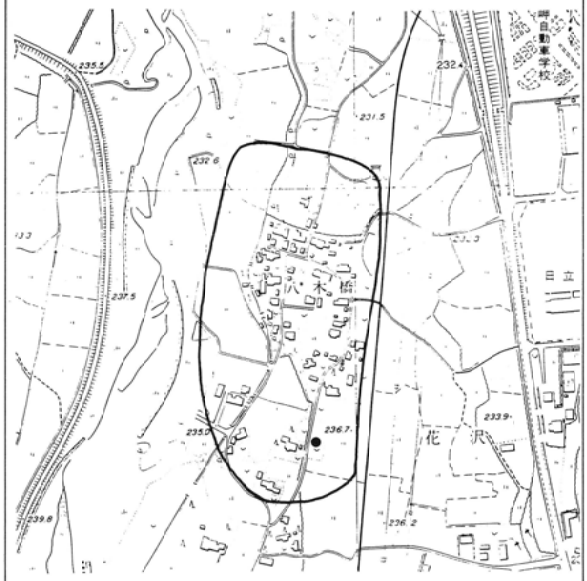
10）　大壇遺跡

本遺跡は、縄文時代（中期）に属している良好な遺跡であり、学校建設に伴い数年前発掘調査が実施された所であり今回の申請はこの南東側に当たる。

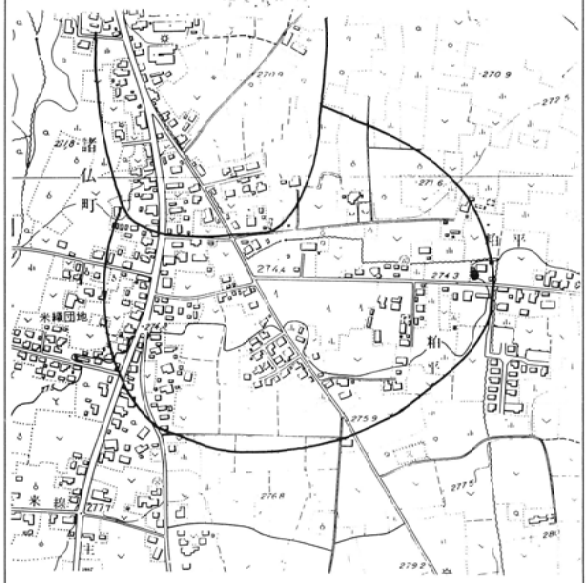
個人店舗併用住宅の新築に伴うものであり、１ｍ×１ｍの試掘坑を２箇所設定した。表土下50cmにて地山層が認められたが、遺構や遺物の痕跡は認められなかった。遺跡範囲の際い東側に当たる所から遺跡は当地帯まで存在しないと判断した。念のため慎重工事で進めるよう指示した。



第８図　上谷地ｂ遺跡位置図



第９図　八木橋ｂ遺跡位置図



第10図　大壇遺跡位置図

11)　東屋敷遺跡

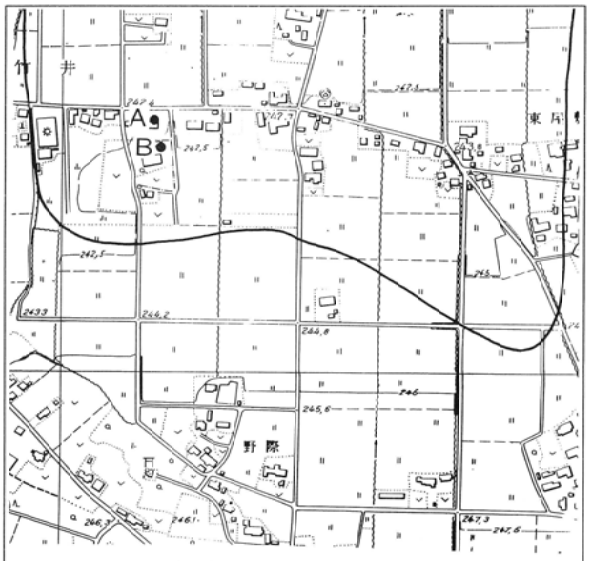
本遺跡の申請は２件である。開発地点が隣接しており同日に実施した。Ａが個人住宅の新築、Ｂは車庫に伴うものである。Ａが１ｍ×１ｍ２箇所、Ｂは１箇所の試掘坑をそれぞれ設定した。当地域は以前に盛土した箇所であるため、表土下１ｍ以上堀込むことによって地山層が認められたが、遺構や遺物の痕跡は認められなかった。慎重工事で進めるよう指示した。

12)　荒屋遺跡

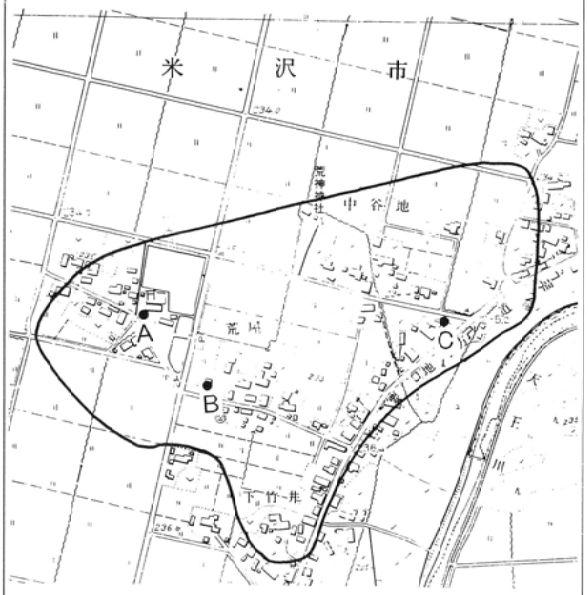
本遺跡の申請は３件である。Ａ・Ｂは個人住宅の新築、Ｃが消雪用井戸設置に伴うものである。１ｍ×１ｍ２箇所の試掘坑をそれぞれ設定した。Ａ・Ｂが表土下約40㎝、Ｃは50㎝にて地山層が認められた。全て遺構や遺物の痕跡は認められなかった。慎重工事を指示した。

13)　台ノ上遺跡

本遺跡は松川の自然堤防上に立地し、近年宅地開発が進んでいる所である。縄文中期の遺跡で、一昨年前に市道改良事業に伴って発掘調査を実施しており、縄文中期として注目される遺跡である。今回の申請は倉庫増築に伴うものである。１ｍ×２ｍの試掘坑を２箇所設定した。表土下約40㎝にて地山層が認められたが、遺構や遺物の痕跡は認められなかった。しかし念のため慎重工事を指示した。



第11図　東屋敷遺跡位置図



第12図　荒谷遺跡位置図

第13図　台ノ上遺跡位置図

14)　大代原遺跡

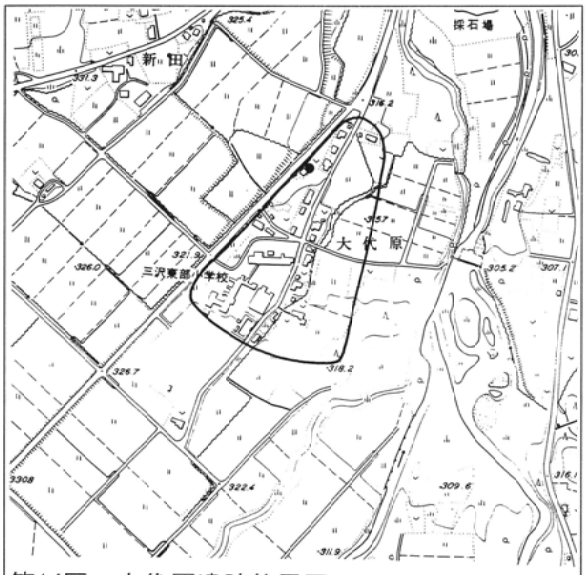
本遺跡の申請は１件である。個人住宅の新築に伴うものである。現地は西側国道121号を走る新道の東側に位置する、微高地であり、１ｍ×８ｍの試掘坑を３箇所設定した。表土下60cmで暗褐色の地山層が認められた。遺構や遺物の痕跡は認められなかったが、慎重工事で進めるよう指示した。

15)　下之町ｂ遺跡

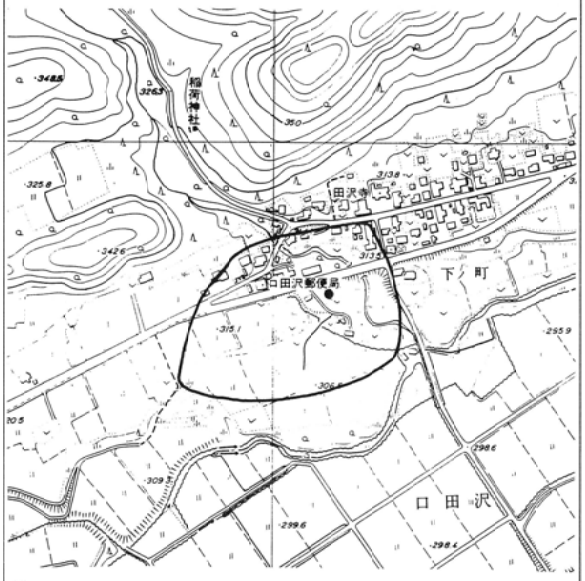
本遺跡の申請は１件である。付近一帯は国道287号線の喜多方へ通じる道路のため個人住宅や看板などに伴う申請が多い箇所である。今回の申請は新築に伴うものである。１ｍ×１ｍの試掘坑を２箇所設定した。表土下50cmで地山層が認められた。遺構や遺物の痕跡は認められなかったため、慎重工事で進めるよう指示した。

16)　小野川ａ遺跡

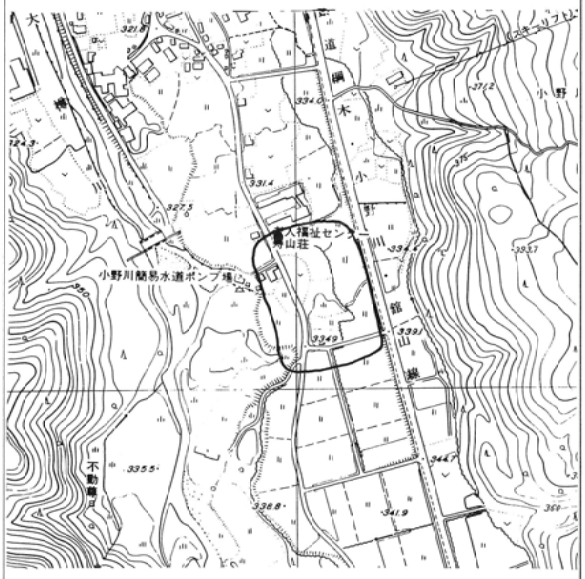
本遺跡の申請は１件である。社員宿舎の新築に伴うものである。河岸段丘上に位置するもので、１ｍ×１ｍの試掘坑を３箇所設定した。表土下40cmで暗褐色シルトの安定した遺構確認面が認められたが、遺構や遺物の痕跡は認められなかった。念のため慎重工事で進めるよう指示した。



第14図　大代原遺跡位置図



第15図　下ノ町ｂ遺跡位置図



第16図　小野川ａ遺跡位置図

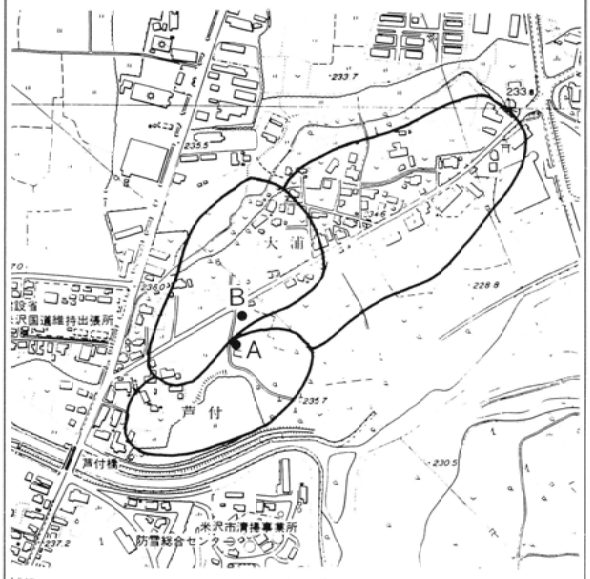
17）上新田ｃ遺跡

本遺跡の南側約200mにある上新田Ａ遺跡は古墳時代の遺跡で、平成４年の調査で溝跡から、多量の土師器が出土している所である。本遺跡に今回申請があったのは１件である。個人住宅の新築に伴うものである。申請地に１ｍ×１ｍの試掘坑を２箇所設定した。表土下40㎝で地山層が認められたが、遺構や遺物の痕跡は認められなかった。慎重工事で進めるよう指示した。

第17図　上新田ｃ遺跡位置図

18）大浦Ａ・Ｂ遺跡

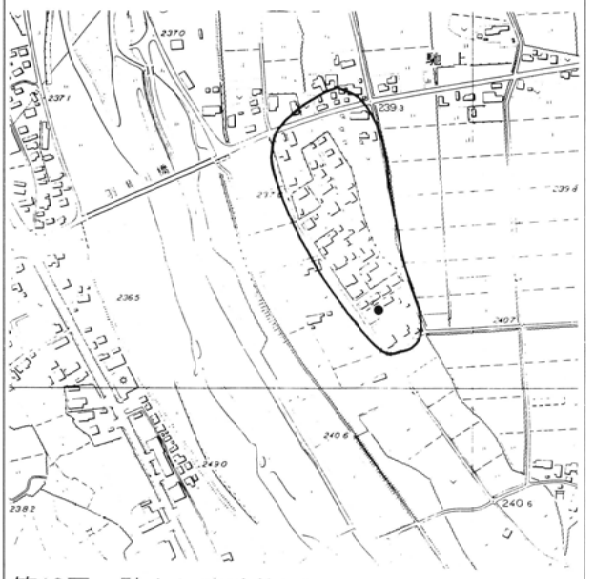
大浦Ｂ遺跡は、発掘調査によって置賜郡衙と推定されている所である。今回の２箇所の申請地は、この場所から南北方向約100ｍに位置する所で、Ａが店舗の増築、Ｂは店舗の新築に伴うものである。Ａは１ｍ×４ｍ、Ｂは１ｍ×２ｍの試掘坑をそれぞれ２箇所設定した。表土下40㎝～50㎝で地山層が認められたが遺構や遺物の痕跡は認められなかった。念のため慎重工事で進めるよう指示した。



第18図　大浦Ａ・Ｂ遺跡位置図

19）馳上ｂ遺跡

本遺跡に申請は１件である。個人住宅の新築に伴うものである。当該地に１ｍ×１ｍの試掘坑を２箇所設定した。表土下40㎝にて暗褐色シルトの安定した地山層が認められた。遺構や遺物の痕跡は認められなかった。慎重工事で進めるよう指示した。



第19図　馳上ｂ遺跡位置図

第２節　上窪遺跡

Ⅰ　遺跡の概要

本遺跡は米沢市街地の東南、万世町梓山地区に位置する。南側地域一帯には第20図で示すように、法将寺遺跡群が分布している。法将寺遺跡は、昭和58年（1983）に林道工事に伴う発掘調査によって、縄文早期、前期、中期の遺構や遺物を検出している。

今回の調査対象とした地域は昨年度にも試掘調査を実施しており、縄文後期の集落跡であることが判明している。

昨年度は遺跡の範囲確認に重点を置いて実施したもので、遺跡の北東を北流する梓川によって形成された、ゆるやかな河岸段丘上及び、旧河川跡に分布している。試掘箇所からは、土偶の頭部や植物の種子を意図的に押圧した小形土器が出土して、注目された。

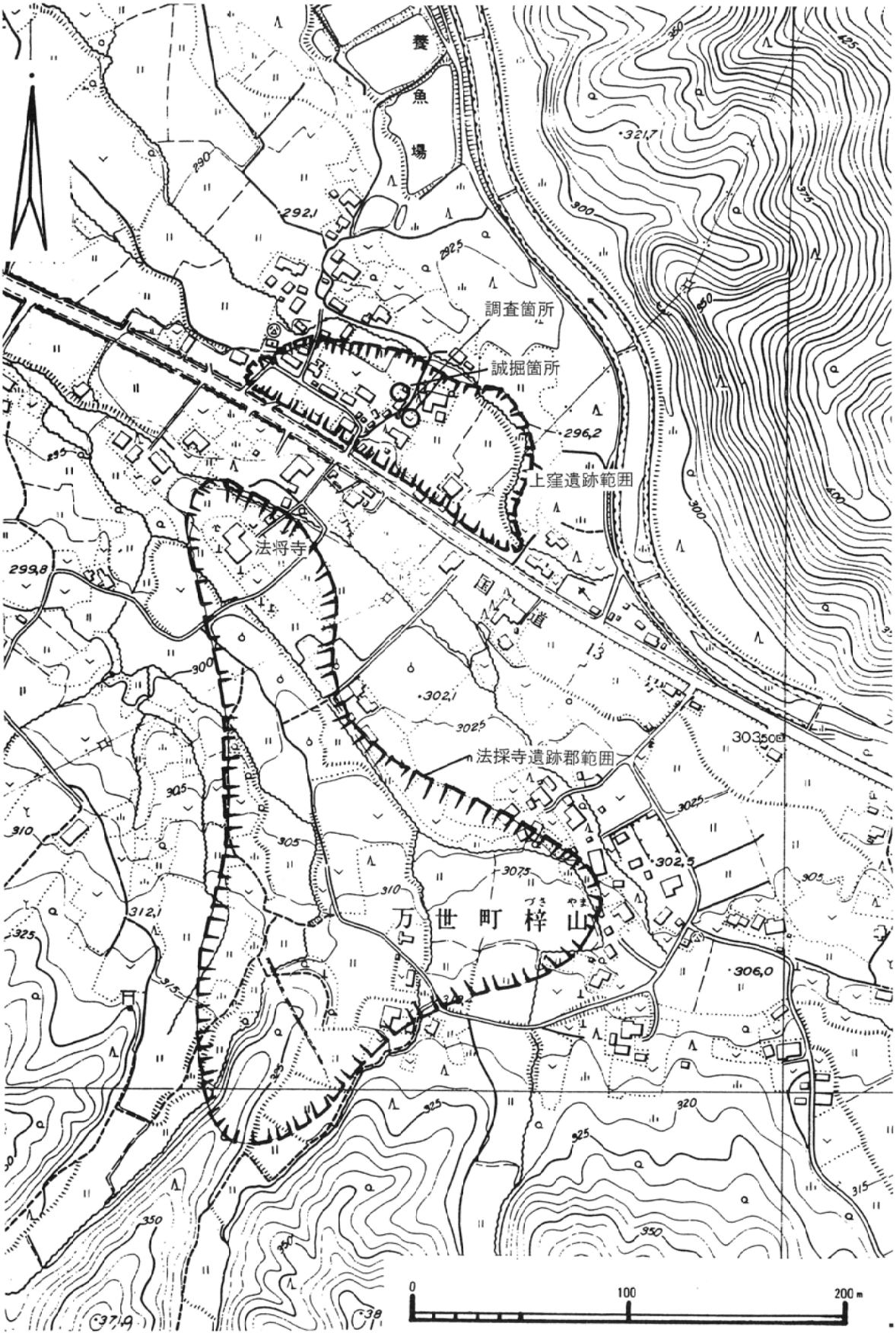
現況は宅地が最も多く、次に畑、水田、道路等で占められる。したがって試掘する場所も眼定され、昨年の試掘箇所からは、住居跡等の遺構は確認されなかった。特徴としては縄文後期特有の礫が多量に存在し、梓川の氾濫を受けた痕跡を呈する。

Ⅱ　調査の経過

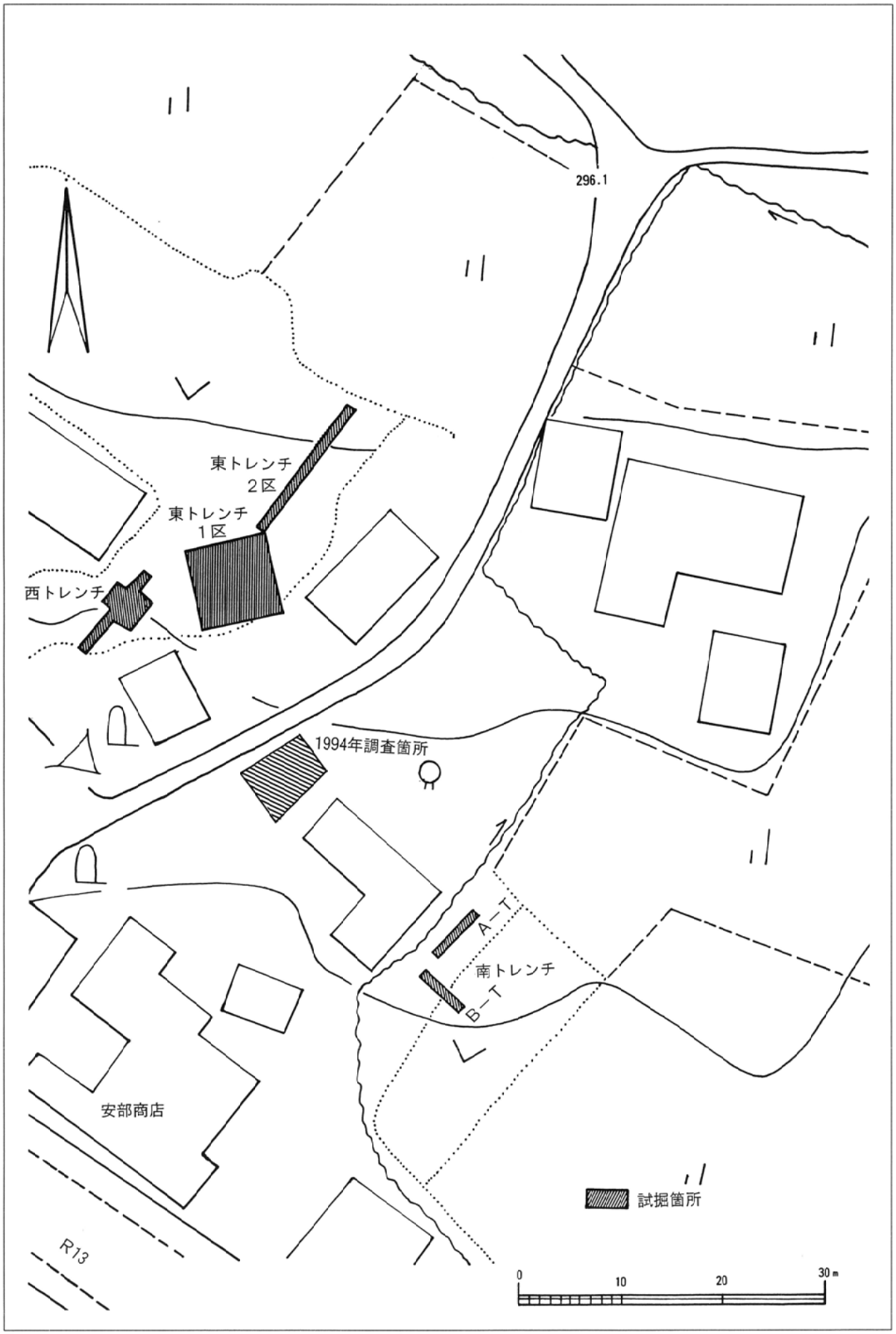
今回の調査は個人の駐車場造成に伴うものであり、期間は平成６年７月11日～同年７月22日、調査面積は64㎡である。調査箇所の現況は畑であるが、周囲に立木があり特に、南東部には欅の巨木がある。地形は南東から北西にゆるやかに傾斜し、段丘斜面の縁辺部に当る。

発掘調査は駐車場の造成予定地の範囲８ｍ×８ｍを対象とした。掘った土は、畑土として再利用するとのことであり、北東部の畑を借用し、場所が小範囲であることや、立木を考慮し重機による表土剥離を断念して、手掘で開始した。表土から約20cmほど下げた箇所から、礫が多量に出土し、集石遺構の可能性も考えられ、礫を残しながら掘り下げを進めた。

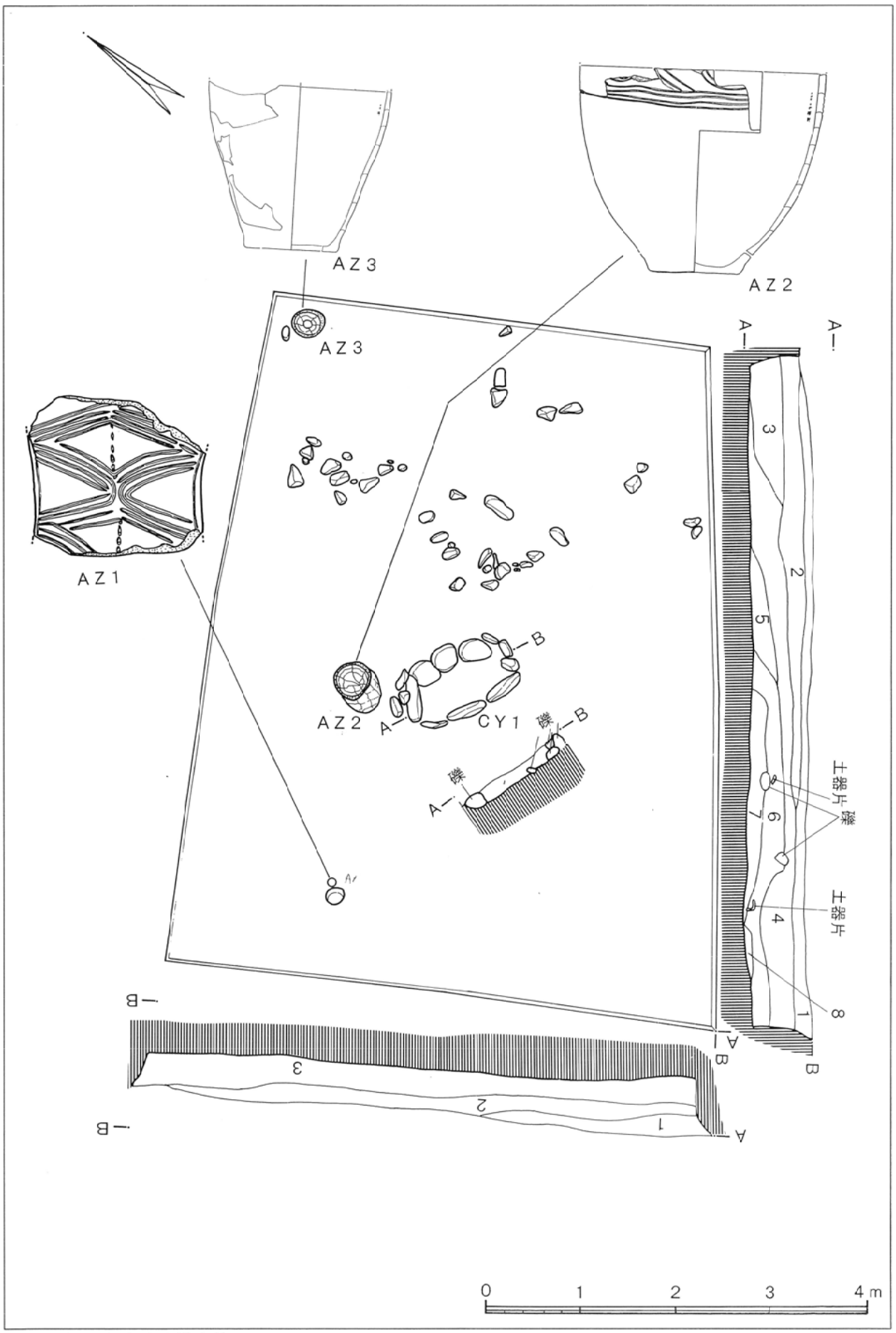
その後、これらの礫群は梓川の氾濫によって、集石し河原石群であることから、礫を取り除いて、掘り下げを続行した。その間、礫のスキ間に立木の根が入りこんでおり、掘りさげるのが困難な場所であった。７月11日の午後には、発掘用具を収納して、今回の調査を終了した。



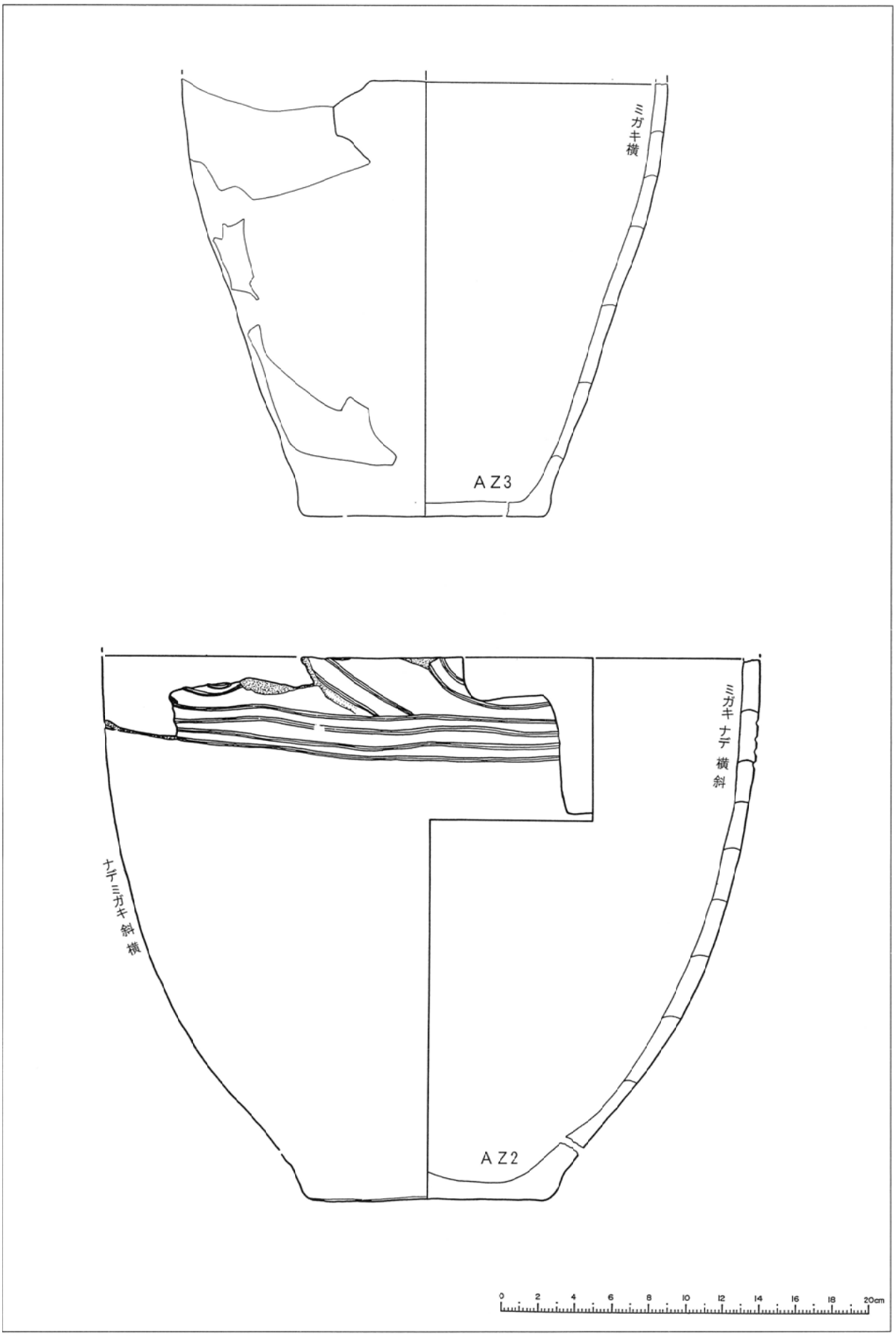
第20図　上窪遺跡位置跡



第21図　上窪遺跡発掘調査地点図



第22図　上窪遺跡遺構全体図



第23図　上窪遺跡出土土器実測図

Ⅲ　検出遺構〔第22図参照〕

今回の調査区からは第22図で示すようにＣＹ１の石組遺構、ＡＺ２、３の埋設土器がある。これらの遺構群について説明したい。

ＣＹ１は調査区のほぼ中央に位置し、東西方向に長径を有す。大きさは東西90cm、南北55cmを測る。平面形状は方形状を呈し、当時の生活面（礫層）を掘り込んで、縁辺に河原石を配置している。埋土からは10cmと浅く、埋土から剥片５点、土器片11点が認められた。

剥片はフレーク１点、チップ４点でいずれも二次調整を施こしていない剥片類である。土器片は西方に位置するＡＺ２埋設土器の破片が大半を占める出土状況であった。ＡＺ２は深鉢形を呈する縄文後期初頭の掘之内Ｉ式併行の土器である。ＡＺ２の位置から考慮すればＣＹ１に付随すると考えるのが自然である。

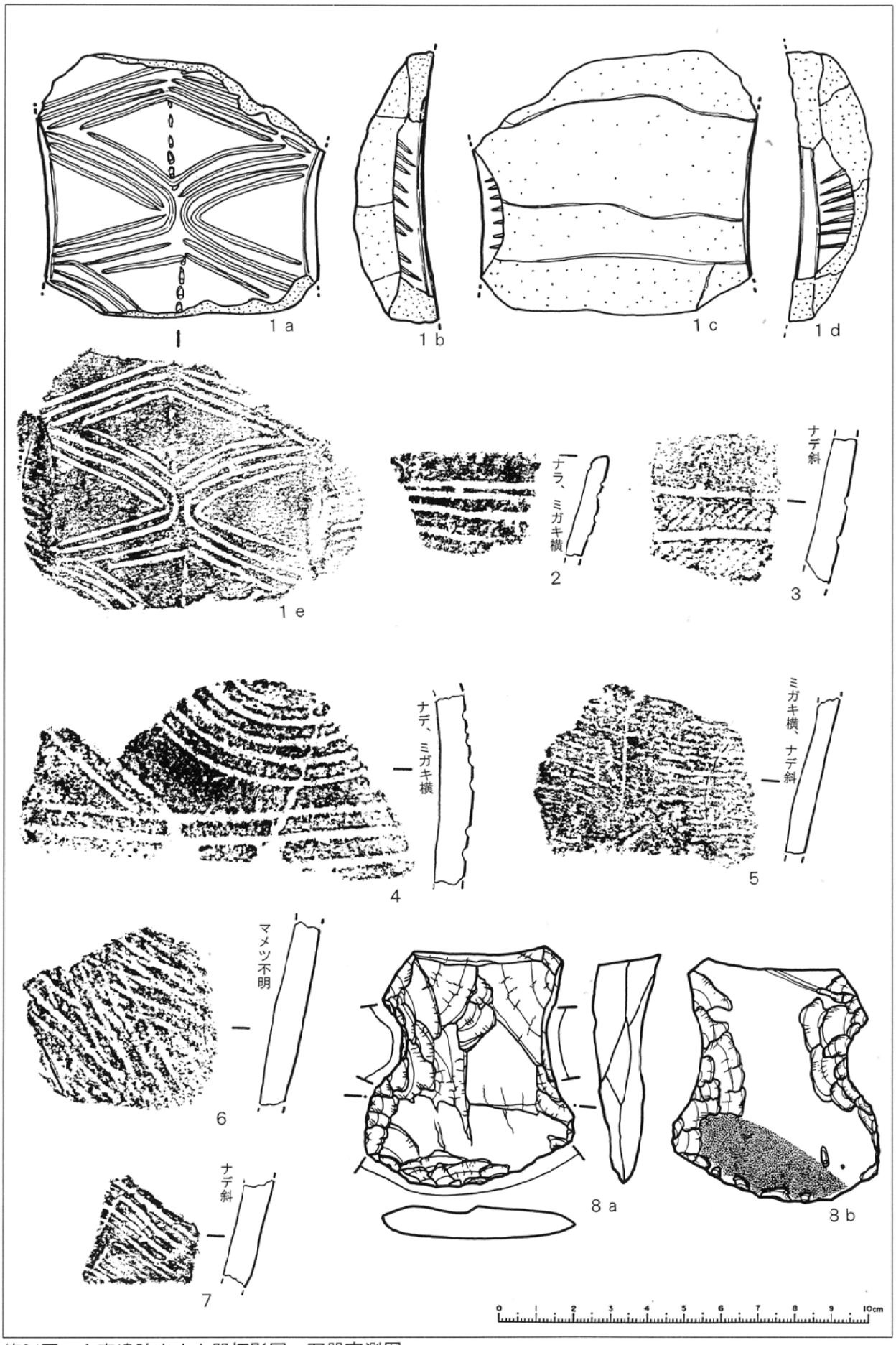
従って、ＣＹ１は縄文後期初頭の掘之内Ｉ式併行の遺構である。遺構を構築するために用いた河原石及び、床面から焼成を痕跡は認められず、炉とは考えられない。ＡＺ２が付随することや周囲の状況から判断すれば、この遺構は配石遺構であり墓壙の可能性も指摘される。

調査区はセクション図に示す様に多量の礫を含む推積層で覆われていた。遺構確認面もＣＹ１が位置する箇所を境として、南側は砂利層、北側はシルト層を呈していた。ＣＹ１が、砂利層を掘り込んで構築しているに対して、ＡＺ３は、シルト層を掘り込んで土器を設置している。ＡＺ３は無文の深鉢形土器で口縁部が欠損している。土器内部の覆土からの遺物は認められなかった。ＡＺ３も、胎土から考慮すればＡＺ２と同様な縄文後期初頭に併行する。

昨年度の試掘調査においては、縄文後期中葉の加曽利Ｂ式併行の土器群が大半であったのに対して、今回の調査区においては、縄文後期初頭の堀之内Ｉ式併行の土器が主流をなす。このことは、上窪遺跡が縄文後期初頭から存在したことを示す。

Ⅳ　出土遺物　［第23・24図参考］

今回の調査区からは総数295点の遺物が出土している。内訳は土偶１点、石器45点、土器244点、礫器６点であった。これらの遺物、配石遺構ＣＹ１出土のフレーク１点、チップ４点、土器片11点を除き、すべて包含層出土で占められる。



第24図　上窪遺跡出土土器拓影図、石器実測図

石器は、打製石斧１点、フレーク34点、チップ10点、土器は復元土器２点、破片は包含層231点であった。礫器は凹石４点、磨石２点となる。これらの主要遺物については、実測図や拓影図を作成した。なを、土器片は磨滅や小破片が多く、図示できたのは数点にしかすぎなかった。次に、各遺物ごとに説明を加えたい。

・土偶［第24図１］

現寸は７cm四方の方形状を呈し、粘土接合部の痕跡を有する板状の土偶の背面部と推測される。平坦な面には、細い棒状の工具を用いて四条の線を基本に文様を表出し、中央に突刺する縦位の列点を施す文で様構成している。また両方の側面にも斜位の沈線を施す。焼成は良好で、暗示褐色を呈す。接合部を有する面は剥離したものであり、土偶の胴部である可能性が高い。出土地点は第22図に図示した。

時期は、ＣＹ１の南方に位置するＡＺ２に併行する縄文後期初頭、もしくは同中葉に位置づけられる。ちなみに、昨年度の試掘調査においても、土偶の頭部が出土しており、上窪遺跡では２例目の土偶発見となった。

・完形土器［第23図１・２］

図示した２点が復元土器で１がＡＺ３・２がＡＺ２である。両面とも埋設土器で縄文後期初頭堀之内Ｉ式併行の土器である。１は現寸で高さ24cm、口縁部が欠損している。２も口縁部が欠損しており、現寸で30cmを測る。２の文様は口縁部に集中するもので、四条の平行沈線と円弧文で文様を構成する。

・石器［第24図８］

分銅形を呈す両面調整の打製石斧でｂ面にスクリントンを貼った箇所に磨滅が認められる。柄に着装されて使用した石器で縁辺にその痕跡を有している。

・土器片［第24図２～７］

４は第24図２の破片で円弧文の一部が認められる。４～７は堀之内Ｉ式併行の縄文後期初頭、２・３は加曽利ＢⅡ式併行の縄文後期初頭の土器群である。

Ｖ　まとめ

今回の調査区は64㎡と小範囲であったが、土偶の出土や配石遺構、発見の成果が得られた。配石遺構は墓壙と解釈され埋設土器のＡＺ２、土偶が付随すると考える。この様な状況から今回の調査区は祭祀的な場と言えよう。

第３節　生蓮寺遺跡

Ⅰ　遺跡の概要［第25図参照］

遺跡は米沢市西南部に位置する館山一丁目地内、県営御成山シャンセの登口に存在する。遺跡が立地する河岸段丘上東方末端部に生蓮寺の寺があることから、「生蓮寺遺跡」と名命された。

発掘調査は過去２回実施されている。第１次は昭和61年（1985）に48㎡を調査した。第２次は昨年度の平成５年（1993）であり、40㎡を調査している。今年度は第３次にあたる調査となる。

第１次、２次調査の成果によると本遺跡は縄文時代及び中世の複合遺跡であることが判明している。縄文時代は前期初頭が主体を占め、少量の同中期に位置する土器片が確認されている。

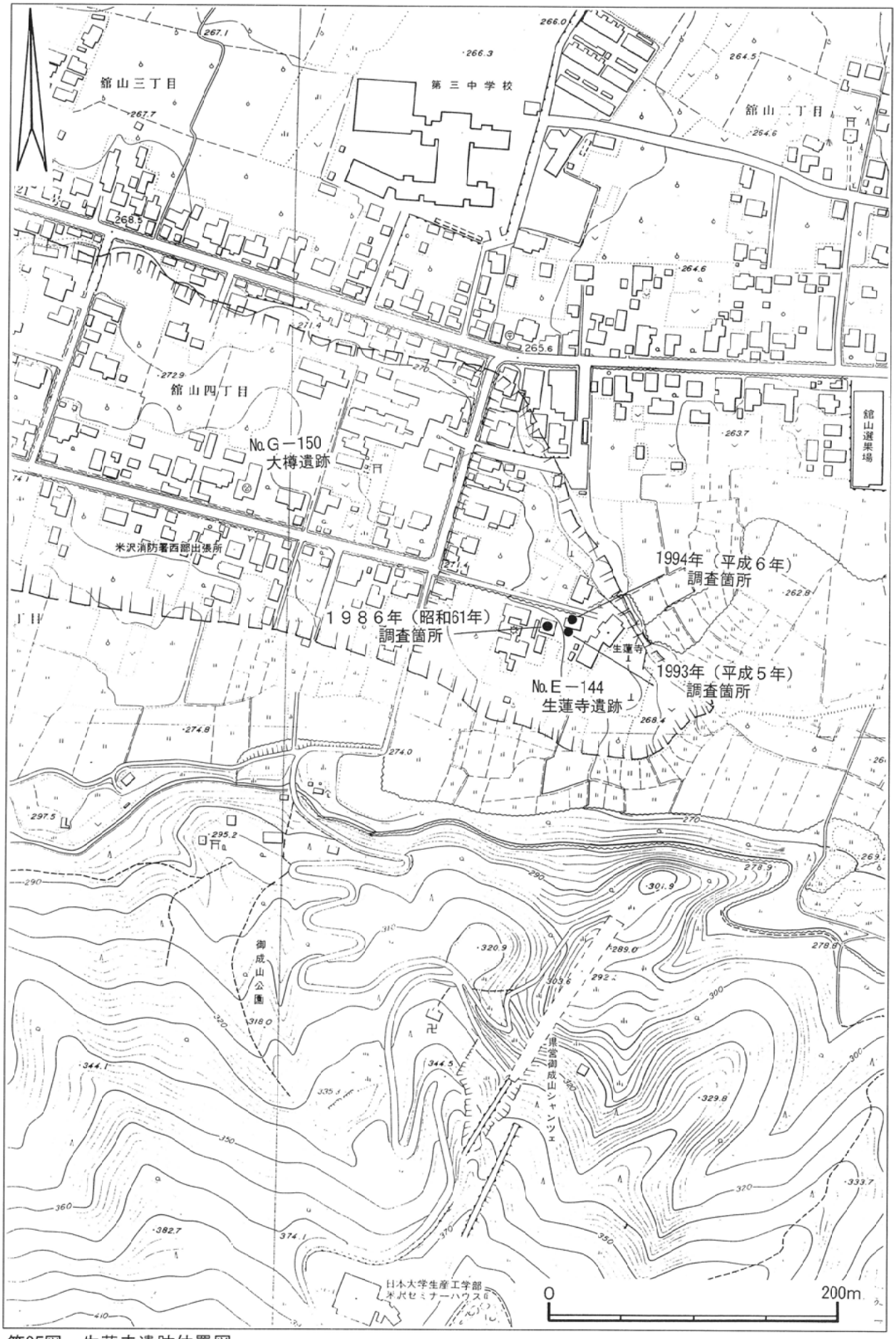
中世は戸長里窯の製品が認められることから、戦国期に位置づけられる。遺構としては、掘立建物跡の柱穴群がある。いづれも調査区が小範囲であるため、全体的な遺構は把握できていない。

Ⅱ　調査の経過

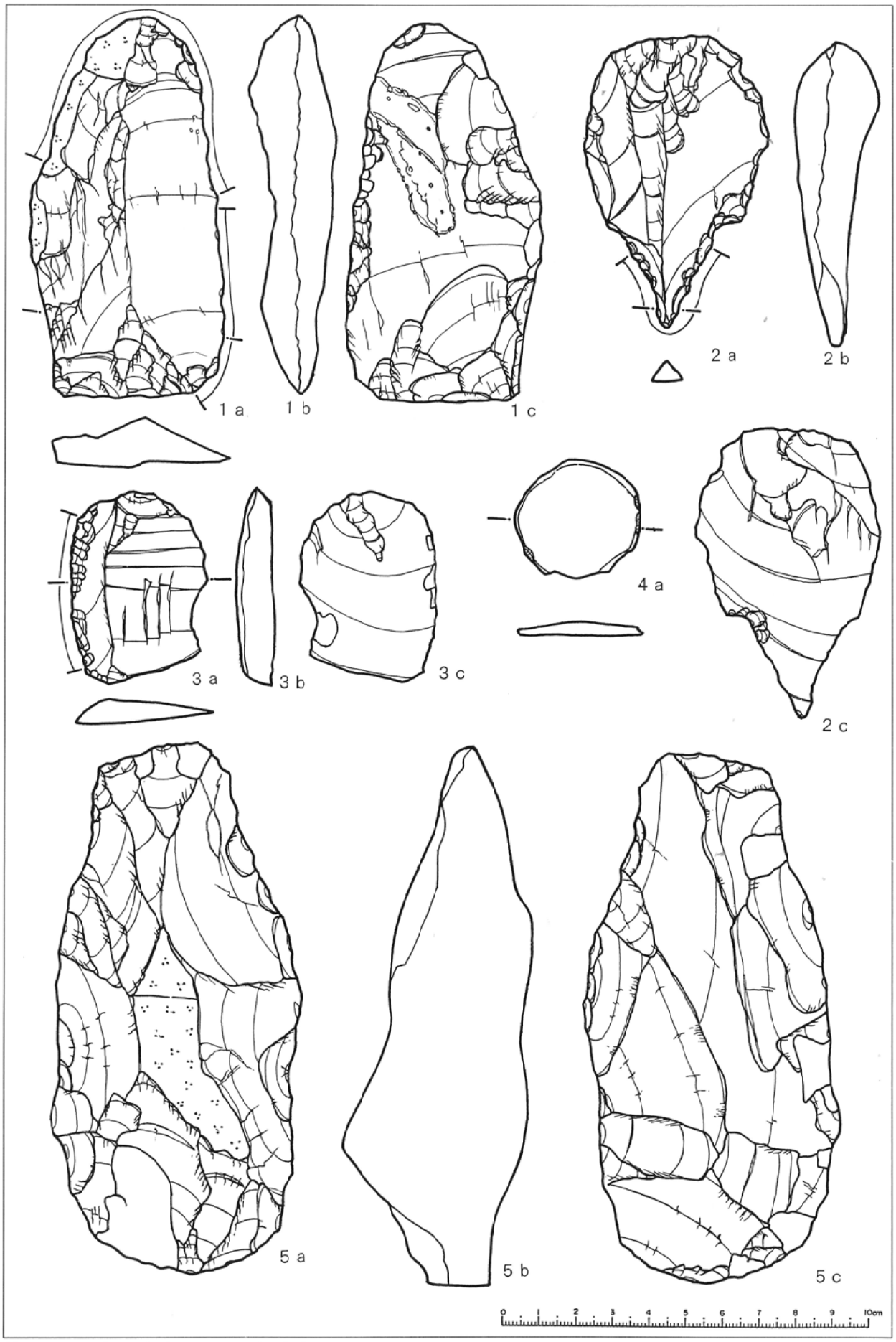
今回の調査区は図示した箇所であり、調査面積は32㎡であった。車庫を建築するために実施したものであり、地権者は昨年と同一である。期間は平成６年５月16日～５月19日の４日間である。調査は以前、家が立っていたところであり、土台石等が散乱していたので、これらのかたずけから着手し、掘り下げは手作業で行なった。

表土は家が立っていたことから、サラサラした土であった。表土の深さは約10～20㎝程度で浅く、一日で表土の除去を終了した。遺物は表土にも認められ石器等が確認されている。土器片は２点と少なく、今回の調査区においても縄文時代の住居跡の発見は望めないと直感した。

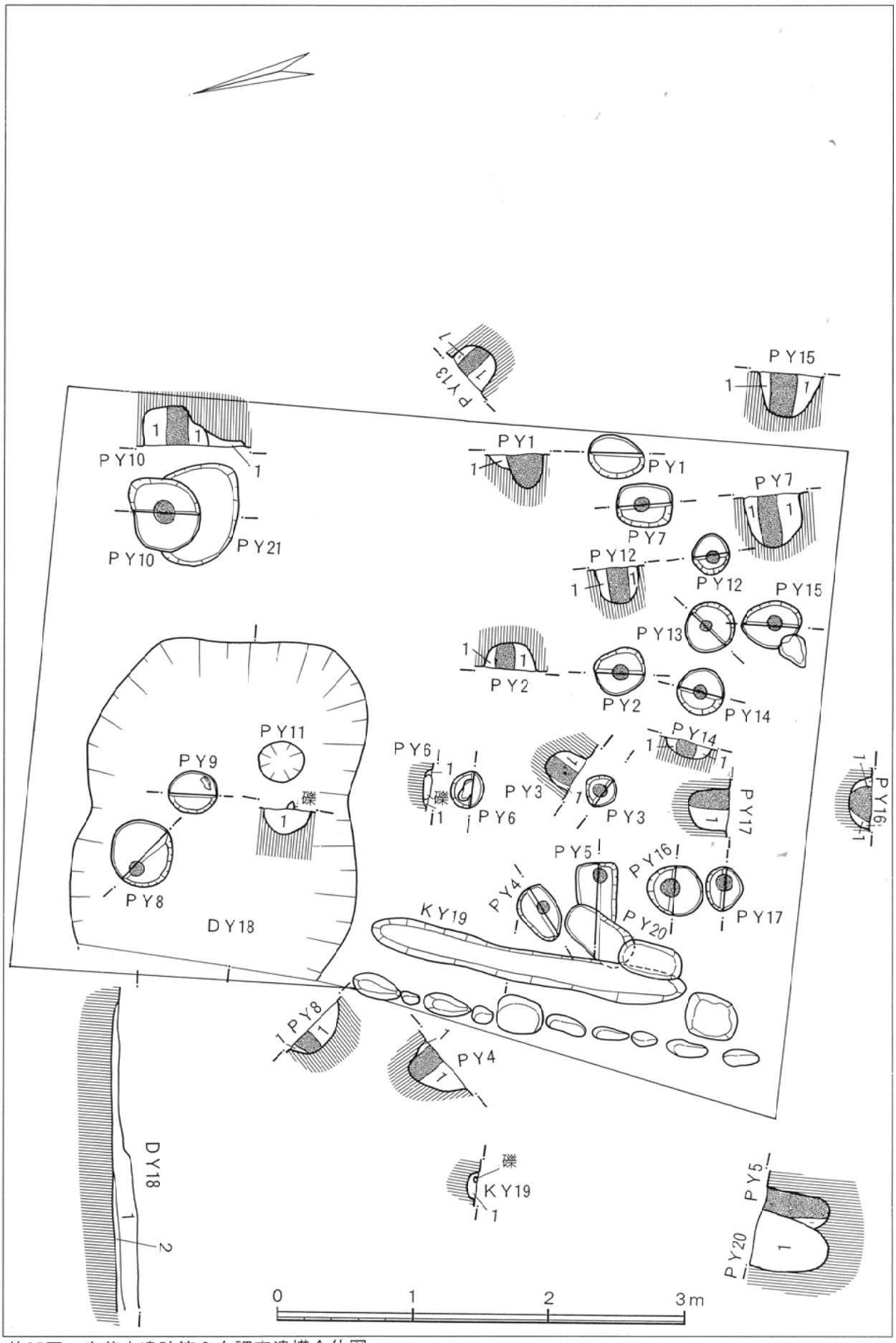
遺構確認面はシルト層であり、柱穴跡が大半を占める検出状況であった。すべての柱痕跡を半裁して柱痕跡の有無を確認した。遺物は縄文時代の石器や土器が認められるが、遺構は中世、近世の柱穴跡で占めていることが判明した。５月19日に図面や写真撮影を実施して今回の第３次調査を終了した。



第25図　生蓮寺遺跡位置図



第26図　生蓮寺遺跡出土土器実測図



第27図　生蓮寺遺跡第３次調査遺構全体図

Ⅲ　検出遺構［第27図参照］

今回の調査区からはＰＹと称した柱穴跡20基、ＤＹの土壙１基、ＫＹとした溝状遺構１基の合計22基の遺構を検出した。これらの遺構群は中世、近世に位置すると考えられる。遺構別に説明を加えたい。

・柱穴跡（ＰＹ１～ＰＹ17、ＰＹ20、21）

平面形状が円形を呈するＰＹ13、14、楕円形状のＰＹ１、15、隅丸方形状を呈するＰＹ５、７、の３形態が認められる。また、ＰＹ６のように中央に礫を配する柱穴もある。セクション図で示す様に柱痕跡を有する柱穴が大半であり、太さは15～20cmを測る。今回の調査区においても、これらの柱穴で構成し、、掘立柱建物については、明確にすることはできなかった。

・土壙（ＤＹ18）

調査区の北西箇所に位置し、長円形状を呈する。最深で20cmを測り、レンズ状に掘り込んで構築している。埋土は微砂質層であり、自然堆積層を有していることから掘立柱の建物に伴う遺構の吟味は不明である。遺物は確認されなかった。

・溝状遺構（ＫＹ19）

幅の平均は24cm、長さ2.2m、深さ10cmを測る。ＤＹ18と同様な埋土である。ことから同時期の遺構と考えられ、掘立建物に付随する雨落溝と想定される。

Ⅳ　出土遺物［第26図参照］

遺物の総数は28点である。縄文時代に伴なう遺物が22点で大半を占める。他の５点は近世であり、中世に位置するのは土師質土器片１点だけであった。第26図には縄文時代前期初頭（花積下層式併行）の石器群を図示した。同図４は石製品である。時期は不明としておく。１～３には使用痕が認められた。５は、製作途上断念した打製石斧の未完成石器であろう。

Ⅴ　まとめ

今回の生蓮寺遺跡における調査は第３次調査にあたる。過去２回の調査に隣接する調査地点であった。検出した遺物、遺構も他の場所と類似する結果が認められた。

第４節　西明寺遺跡

Ⅰ　遺跡の概要

本遺跡は米沢市遠山町字薬師下に所在し、西明寺境内を遺跡範囲として把握している。周辺は市民の山として知られる斜平丘陵の山裾に立地しており、遠く吾妻山陸から突き出た長峰は、南から標高605ｍの栃窪山、最高位の標高660,2ｍを測る笹野山、夏の火祭りで有名な標高559,68ｍの愛宕山と標534,1ｍの羽山と続く。西明寺遺跡の位置する地形は第25図で示す様に、斜平丘陵の未端部、羽山から北東に張り出したなだらかな尾根の山麓部に位置し、北方部は北沢によって形成された小扇状地が認められる。

この小扇状地にも縄文晩期の遺跡が立地する。また中腹には覚範寺廃寺跡が確認されている。昭和62年と同63年の２年間に亘って調査を実施している。その際にも、石器等が出土している。

愛宕神社や寺蔵院を中心とする遺跡も確認されており、多量の遺物が表採され、縄文時代でも比較的新しい後期や晩期の遺物が多く認められている特徴を呈する。

Ⅱ　調査の経過

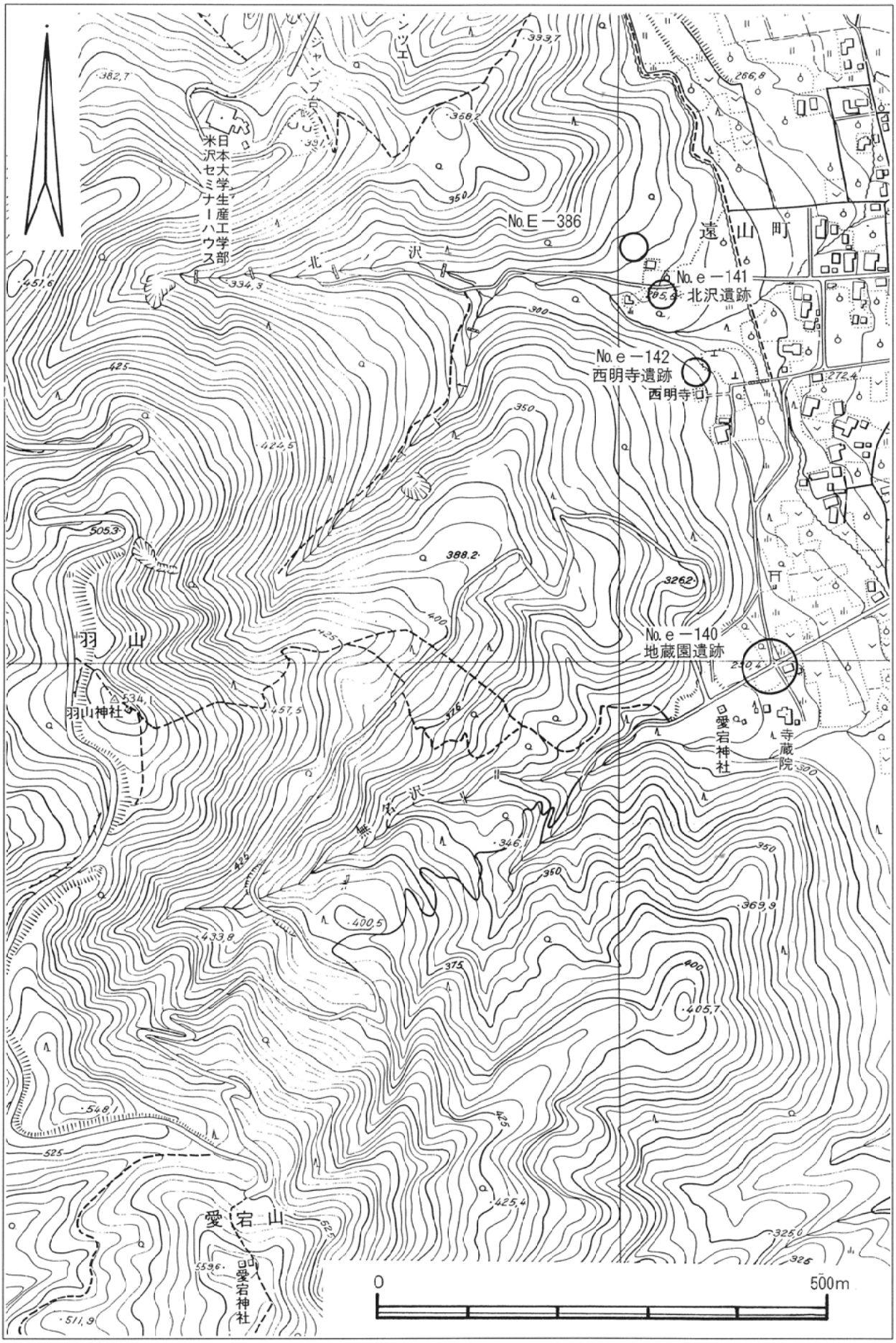
墓地造成に伴なう発掘調査として、平成６年10月11～同年10月20日、同年11月14，15日の期間で実施した。調査対象面積300㎡、精査面積は156㎡である。

調査区は、立木伐採及び除去作業の際に使用した、重機の影響により部分的に攪乱や消平を受けていた。これは、遺跡範囲がこの地域まで広がっているとの認識がないままに、作業を実施した結果であった。

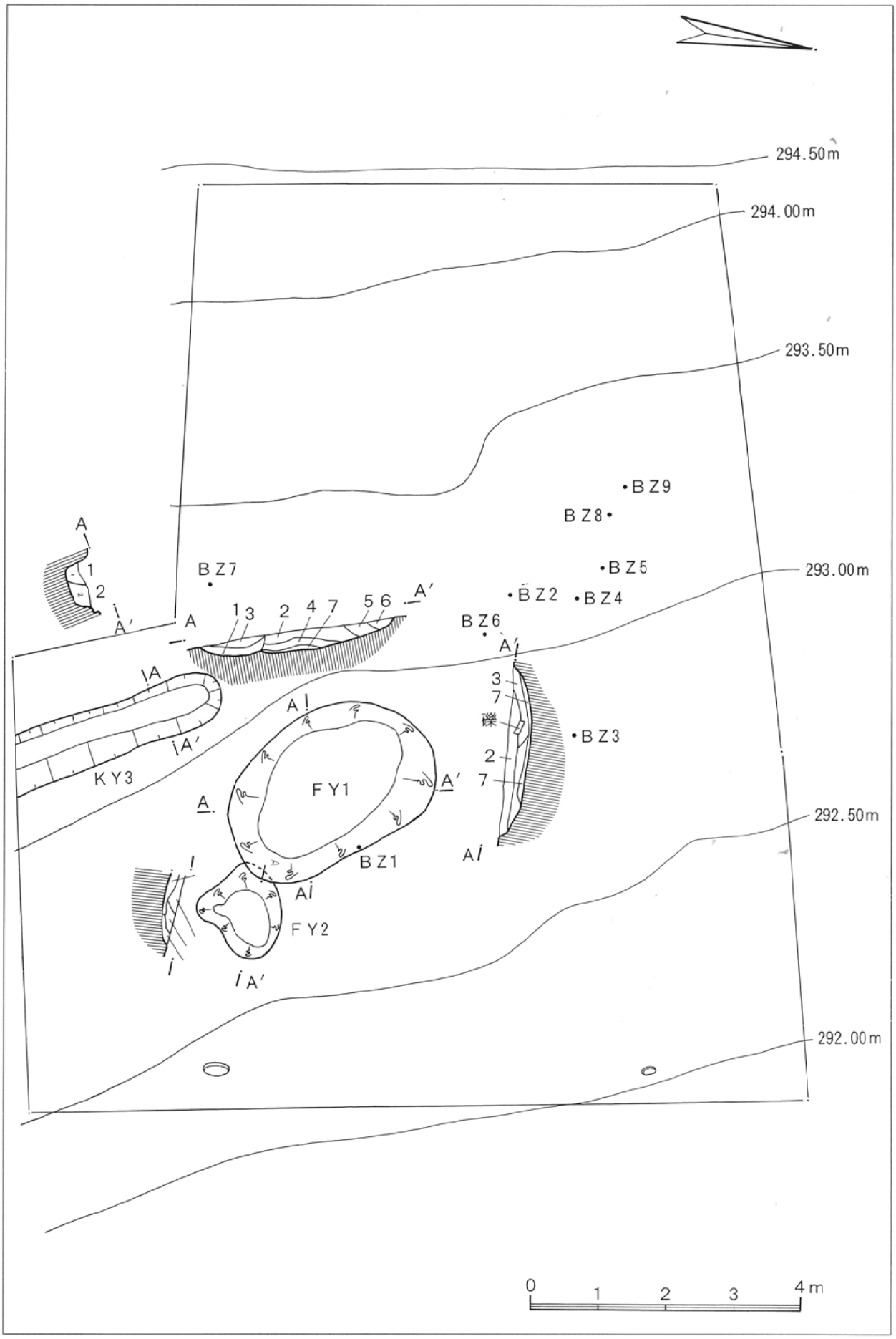
調査区は薬師堂の北方に位置し、この薬師堂北側に隣接して県指定の樹木である「トラノオモミ」がある。この樹木を考慮して、調査区設定した。

調査は表土に散乱している、残土の整理から開始する。表土は落葉を取り除くと遺物が出土する状況であった。遺物は陶磁器類も多く認められたが、これらの遺物は、周辺の墓地から混入したものと判断され、遺跡には関係ないものである。

11月14、15日の両日は西明寺本堂建設予定地の試掘を実施した。この地点は



第28図　西明寺遺跡位置図



第29図　西明寺遺跡遺構全体図

今回の調査区から南へ約30m行った箇所である。重機を使用して試掘調査を実施したが、遺物、遺構は発見されなかった。11月15日に発掘用具を撤収して今回の発掘調査並びに試掘調査を終了する。

Ⅲ　検出遺構［第29図参照］

今回の調査区は約２ｍ前後の高低差を有する斜面に立地するもので、北側が急な斜面となっている。遺構は西から東へ張り出した斜面に構築されたもので、土壙２基、溝状遺構１基が確認された。下記に説明したい。

・土壙［ＦＹ１・２］

いづれも不整形状を呈する平面形状であり、隣接して認められた。当初ＦＹ１は竪穴住居跡ではないかと推測したが、柱穴が存在しないことと埋土の状況からＦＹ２も含めて、風倒木壙であることが判った。埋土からは土器片や剥片が少量出土している。土器片は第27図２・３，第28図50,51がある。第27図２・３は縄文時代早期中葉の田戸上層式併行の土器片であることから判断すると同時期にＦＹ１・２を位置づけたいが、第28図50・51も混入しており、縄文前期初頭の風倒木痕が適当である。

溝状遺構（ＫＹ３）

調査区外の南方に延びることから、全容はわからなかった。現況で長さ3,3m幅は80cm、深さは30cmを測る。埋土は赤褐色土で、焼土や炭化物を含む、自然推積層である。

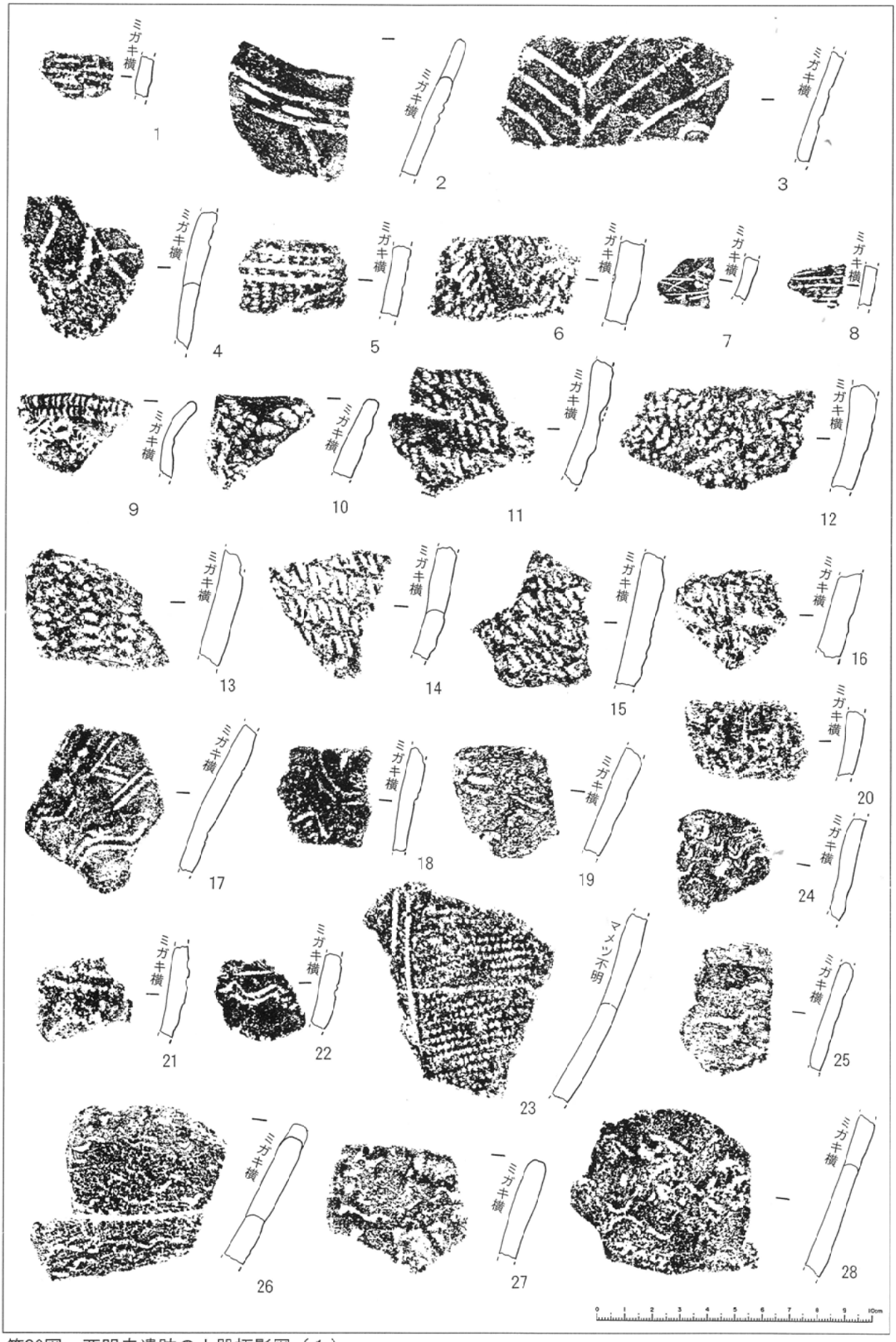
調査区南方に隣接する薬師堂の整地層に類似する埋土であり、薬師堂に関連する施設として、構築されたと考えられる。ちなみに、薬師堂の創建は江戸時代初頭と言われている。

Ⅳ　出土遺物［第30～34図参照］

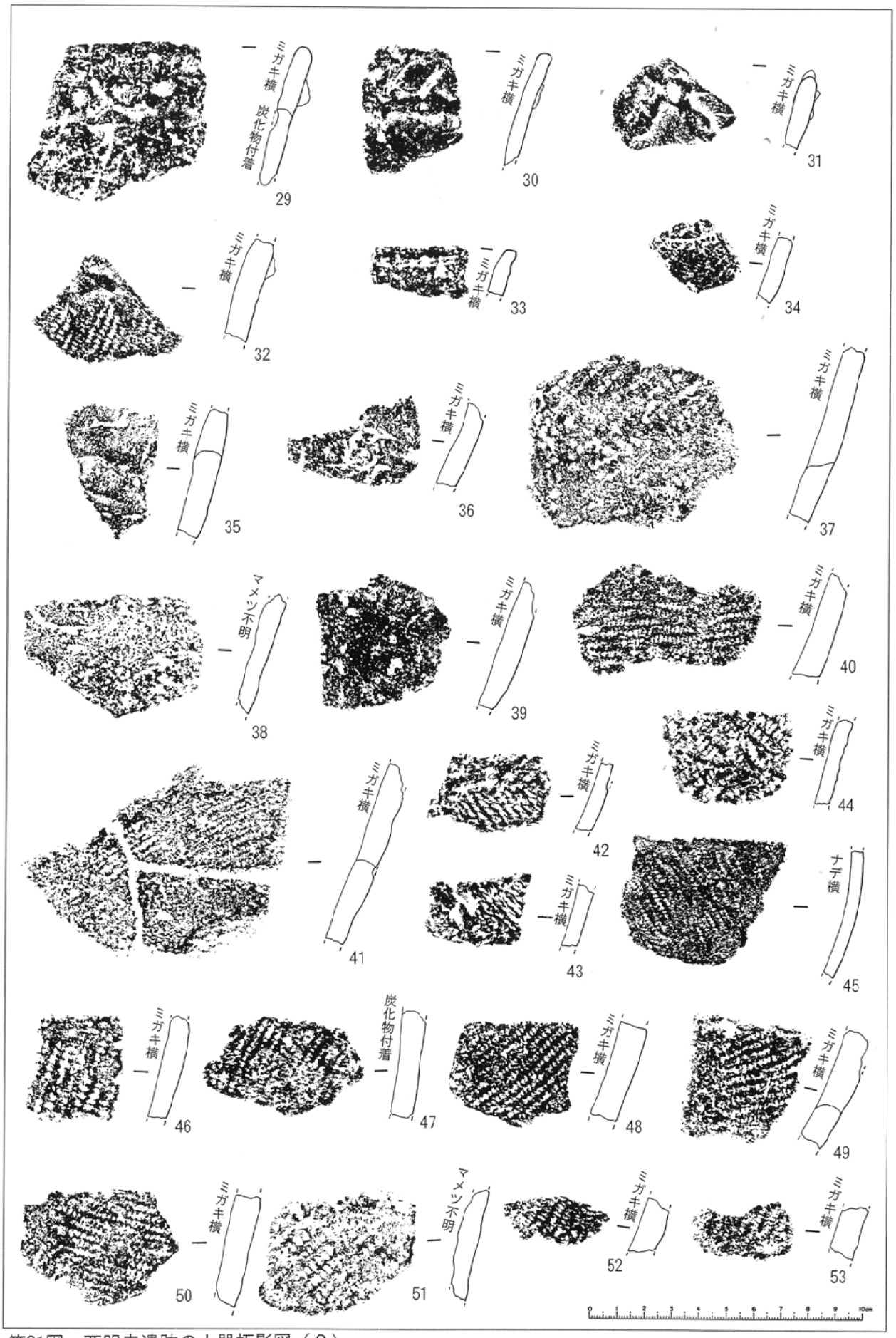
今回の調査区からは総数で447点出土している。時期は縄文時代、中世、近世に位置する遺物群であった。種類別に見ると土器、石器、礫器、陶磁器、古銭が認められる。これらの遺物について列記した順に説明を加えたい。

・土器［第30・31図参照］

すべて破片で占められ、197点を数える。調査区全域に亘って分布する。層位的には、明確に把握できなかった。53点については拓影図を作成した。土器片



第30図　西明寺遺跡の土器拓影図（１）



第31図　西明寺遺跡の土器拓影図（２）

の大半は胴部片で142点が認められ、他に底部片の２点が検出されている。底部片の１点は尖底土器の形態を呈している。拓影図を作成した土器群を年代別に述べる。

・土器の分類

出土した土器群は胎土や文様表出技法から縄文早期中葉と縄文前期に位置する土器群である。これらの土器群は、類別が可能で、Ⅰ群土器（縄文早期）、Ⅱ群土器［縄文前期］に大別し、さらに特徴を加えて説明したい。

・Ⅰ群Ａ類［第30図１］

撚糸文土器片で今回の調査区からは１点認められた。焼成は良好で胎土に少量の石英砂を含み赤褐色を呈す。原体の間を開けて転回施文する稲荷台式に近いものと考えられ、本市では桑山遺跡群の二タ俣Ａ遺跡（ＳＴ５）出土の撚糸文土器に類似する。

・Ⅰ群Ｂ類［第30図７・８］

同一個体の破片である。細沈線文を主体とした土器片で、平行沈線文と格子目状沈線文を特徴としている。関東の田戸上層式に併行するもので、焼成はすこぶる良好で色調は茶褐色を呈し、他の土器片と比較するとやや薄い。

Ⅰ群Ｃ類［第30図２～４］

３点は同一個体の破片である。２は口縁部片で器形が波状を呈する深鉢形土器であることがわかる。短沈線を用いた文様構成であり、田戸下層に併行する土器片と考える。

・Ⅰ群Ｄ類［第30図５・６］

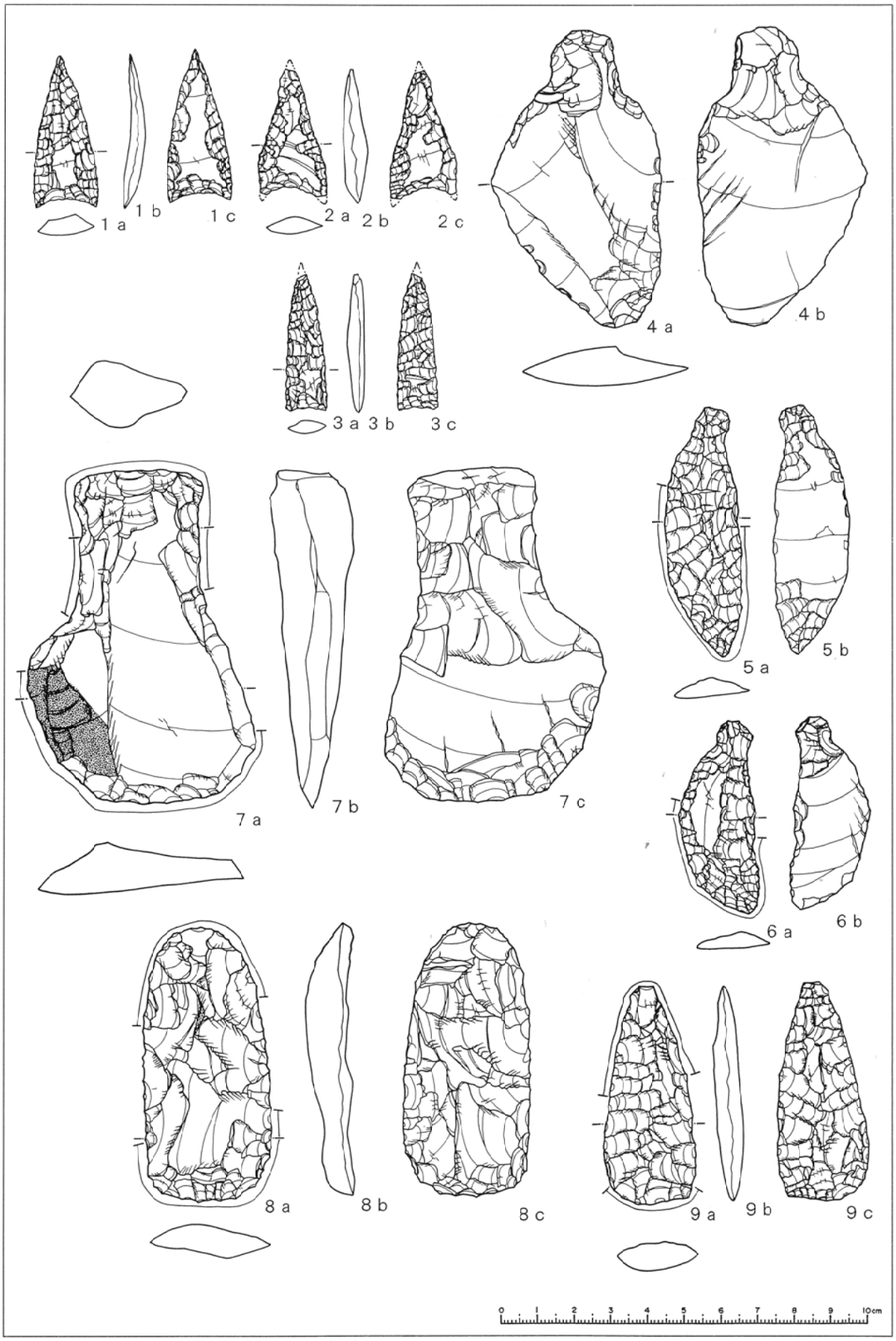
貝殻文を施した土器片で大寺式に併行する。前述した関東地方の田戸上層に併行し、本市の万世町桑山二タ俣Ａ、同町柿ノ木遺跡からの出土例がある。以上が縄文早期の土器群である。

・Ⅱ群Ａ類［第30図９］

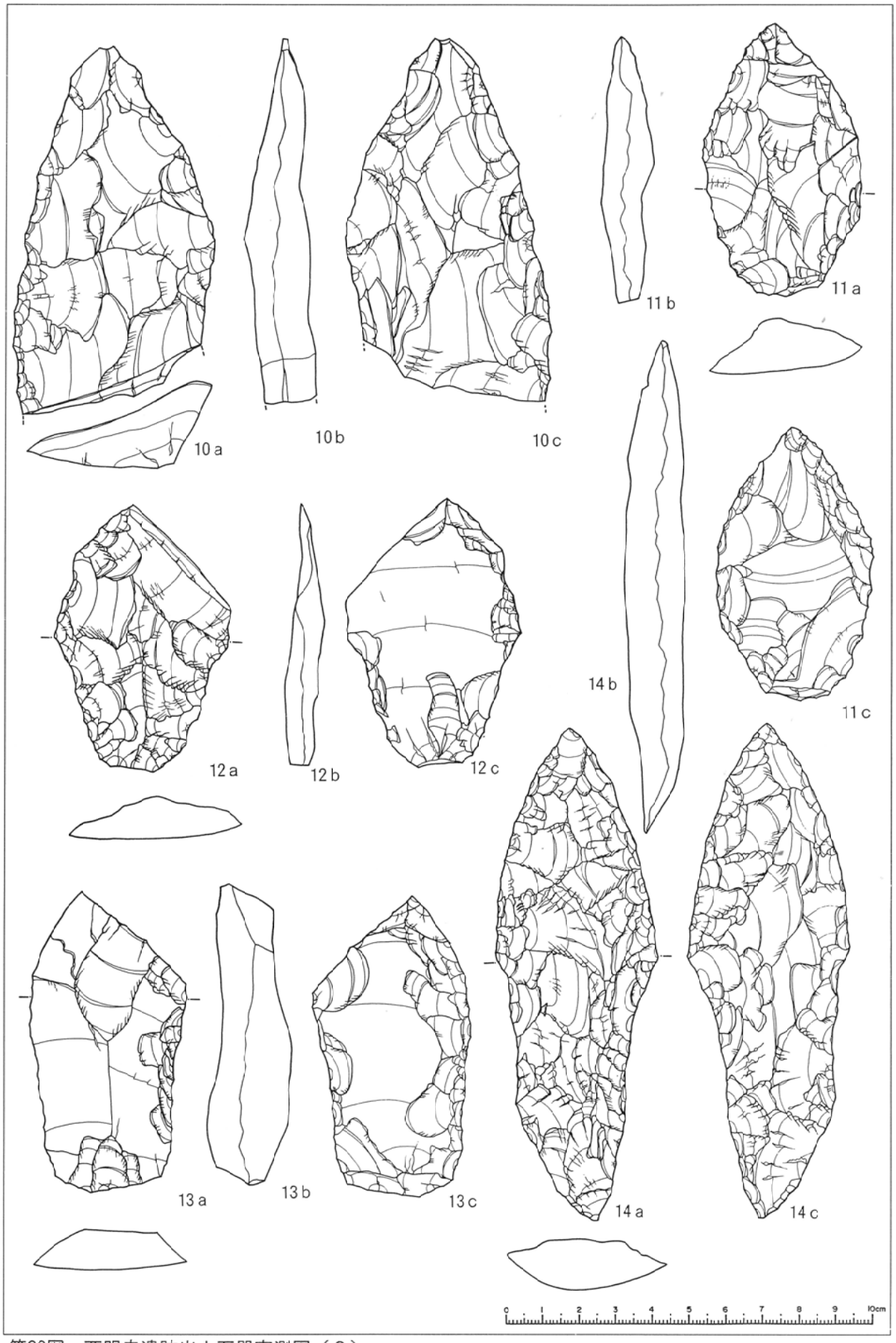
半裁竹管を工具に用いて施文する文様を有する土器片である。花積下層の後にくる土器文様で関東の二ツ木、東北の松原式に併行する。今回出土した土器片は小形の形状を呈す。胎土にやや大粒の石英砂と少量の繊維を含む。

・Ⅱ群Ｂ類［第30図10～16］

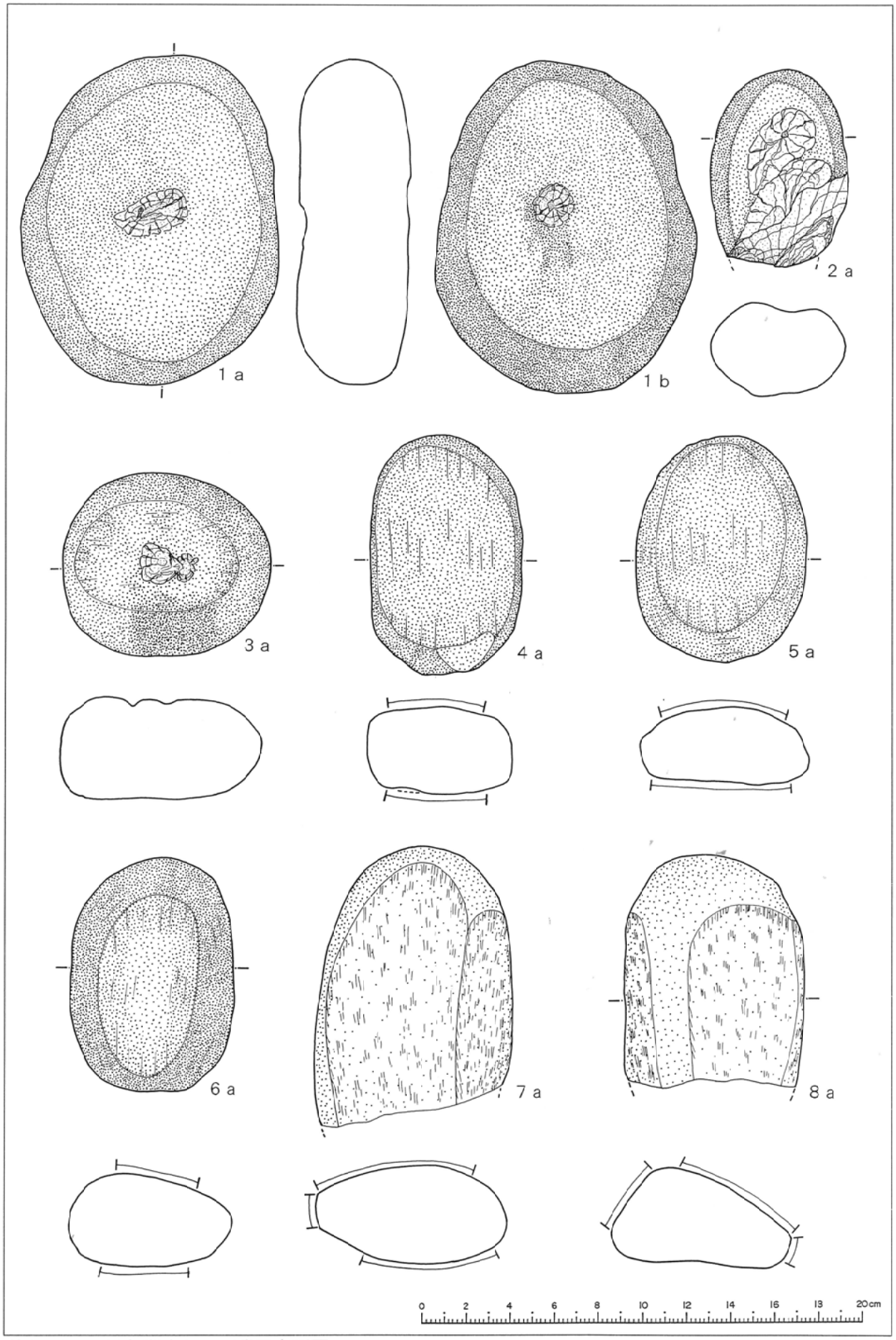
ループ文や原体の未端を押捺転回した土器群でⅡ群Ａ類と類似する。



第32図　西明寺遺跡出土石器実測図（1）



第33図　西明寺遺跡出土石器実測図（２）



第34図　西明寺遺跡出土の礫器実測図

・Ⅱ群C類［第30図17～28］

半裁竹管や棒状工具による山形文やS字状文を施した土器群である。東北地方南部の大木２式に併行するもので、17・18・22の３点は関東の浮島Ⅰ式と分類される。

・Ⅱ群D類［第31図29～32］

貼付文が認められる土器群を一括した。斜位の刺突文を施す土器片もあり、大木２ｂ式併行と考えられる。明褐色土を呈し、小粒の石英砂を少量含む胎土である。29の土器片には多量の炭化物が付着していた。

・Ⅱ群E類［第31図33・34］

半裁竹管による爪形文を施文したものである。33は小形土器の口縁部片である。東北南部の大木５式に併行するものとみられる。

・Ⅱ群F類［第31図35・36］

ゆるやかな縄文原体を転回した土器片である。胎土や色調から大木２式に併行する土器群とみられる。

・Ⅱ群G類［第31図37～53］

縄文原体を回転施文した土器片で、羽状縄文や斜縄文が主体をなす。42・43は撚紋片で縄文前期初頭、他は前期に位置する破片が大半と考えられる。焼成は良く、胎土に石英砂を多量に混入している。

・石器［第32・33図］

完成石器として石鏃３点、第29図１～３、石匙３点、同図４～６、打製石斧１点、同図７、石篦状石器２点、同図８・９、尖頭状石器４点、第30図10～13、石鋸１点、同図14の合計14点が出土した。剥片はフレーク180点、チップ106点である。

・礫器［第34図］

凹石３点、同図１～３、磨石４～８の５点で合計８点を数える。河原石を使用したもので、石材は安山岩を使用している。

その他の遺物として古銭６枚「實永通宝」、陶磁器36点、現代が大半を占めると判断した。周辺の墓地からの混入品と考えられる。

Ⅴ　まとめ

今回の調査区からは剥片を中心に遺物が認められたが、遺構は検出されなかっ

た。この様なケースは珍しい。土器はある程度の時期差を示す遺物が認められるが、遺構等が確認できなかったことから小規模な集落跡よりもキャンプサイド的な遺跡と推測される。今後の周辺の調査に期待したい。

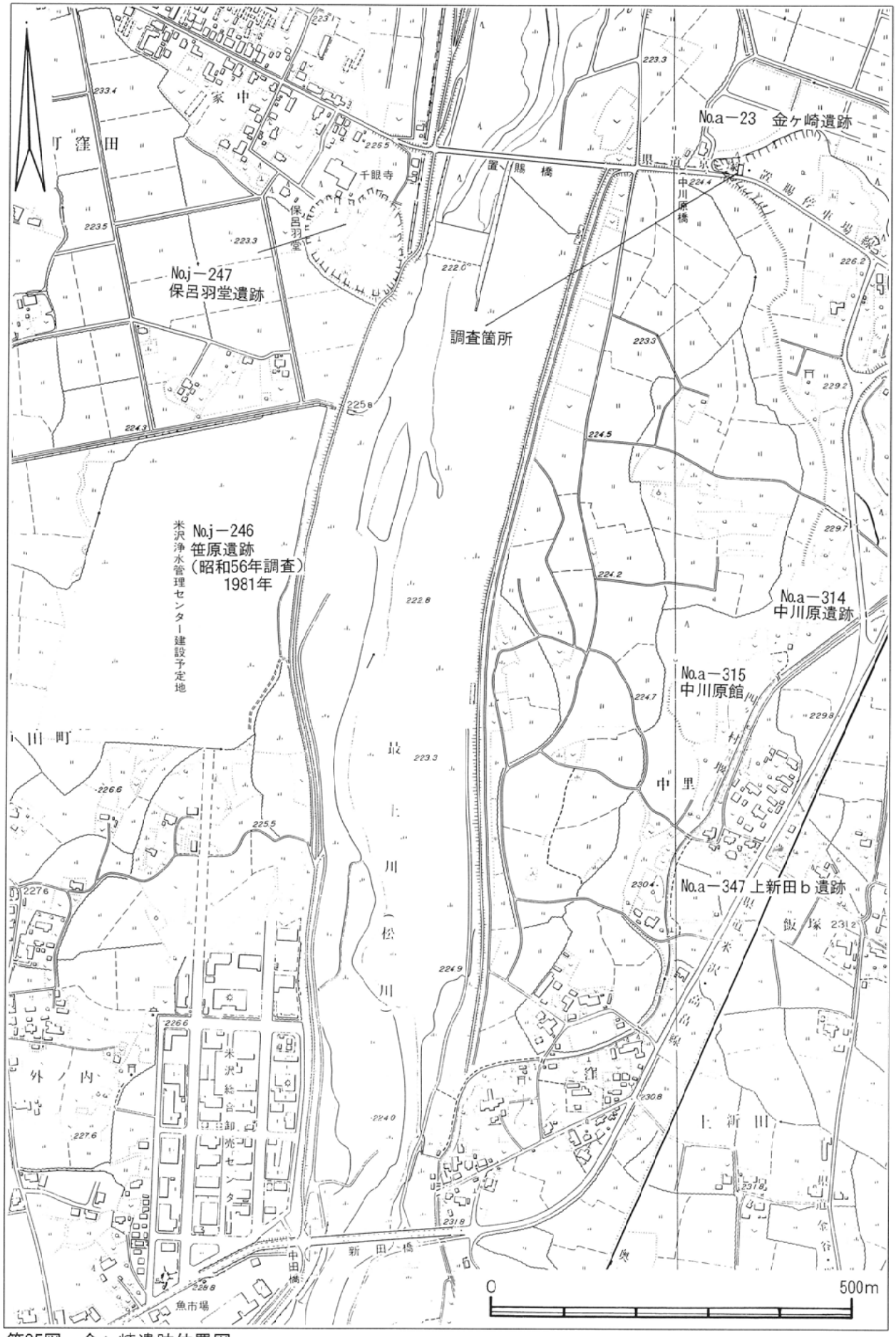
第５節　金ケ崎ａ遺跡

Ⅰ　遺跡の概要［第35図参照］

本遺跡は米沢市北東部に位置し、上郷地区中川原橋付近一帯に立地する。北西には吾妻山系から発する最上川（松川）が北流する。遺跡は最上川によって形成された発達した河岸段丘上に位置し、周辺には多くの古代の遺跡が確認されている。　河川対岸の地域は現在、米沢浄水センターがあり、この施設の建設に関連しては、昭和56年に発掘調査を実施している。調査によって、奈良時代の遺物、遺構が発見され、中でも米沢市では初めて出土した木簡が注目を集めた。また層位的に出土した須恵器は当市の編年基準となっている。また河川段丘に沿って走る県道米沢・高畠及び県道京塚、置賜停車場線の没道には奈良時代を中心に遺跡が分布している。　この様な立地に位置する本遺跡に関しては過去２回の試掘が実施されている。宅地造成や資材置場造成に関連する試掘調査であった。両地点からは遺物、遺構は確認されなかった。

Ⅱ　調査の経過

猛暑が続く平成６年８月１日から試掘調査を開始した。調査は地権者の理解を得て、立木を伐採して進めることにし、この作業から着手した。伐採には２日間を要した。表土は剥離する作業は重機を使用することにし、残土を置く場所を借り受けて８月３日から開始した。　この作業は１日で終了した。表土剥離の段階で遺物は１点も出土しなかった。８月４、５日の両日は調査を実施したが、遺構、遺物は確認されなかった。今回の調査区は300㎡であったが、この範囲には生活の痕跡がないものと判断してよい。その後、周辺の試掘を手掘りで実施した結果、今回の調査区と同様な状況であった。　金ケ崎ａ遺跡全体の約３分の１を対象として実施した結果は前述した通りである。発達した河岸段丘で、地山はシルト質層であり、好条件であるが、地形の縁辺部には遺構は認められず、むしろ段丘の中央寄りに分布しているものとみられる。８月12日に埋め戻して、今回の試掘調査を終了した。



第35図　金ヶ崎遺跡位置図

第６節　大壇遺跡

Ⅰ　遺跡の概要［第36図参照］

現在、山形県立米沢興譲館高等学校がある南原地区に本遺跡は位置する。この学校の建設に伴なって新たに二箇所の遺跡が確認され、大壇Ｂ、Ｃの名称で呼ばれる。従って当初の大壇Ａ遺跡と呼ぶのが正しいが、すでに、Ｂ、Ｃは調査が実施され、前述した工事によって消滅ているので、ここではあえて大壇遺跡と称することにした。

調査は昭和58に置賜考古学会、昭和59・60年に山形県教育委員会、昭和62年に米沢市教育委員会がそれぞれ調査を実施し、成果を上げている。時期は縄文前期初頭、同末葉、同中期末葉の複合遺跡である。

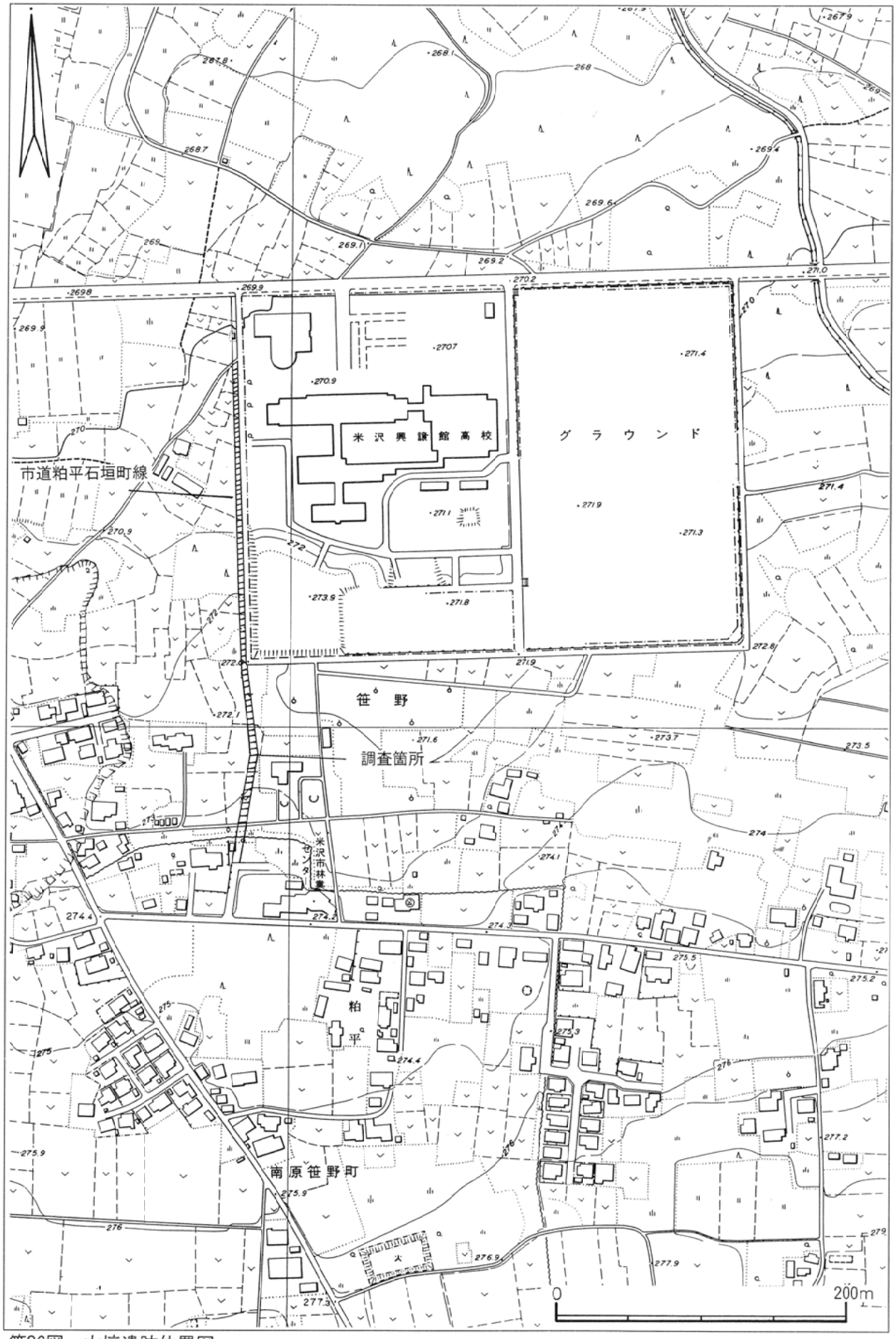
本遺跡の北西部には大塚山遺跡が隣接し、両遺跡を含めた面積は83.000㎡と想定される。一部は宅地、工場、道路等になっているが、中心と思われる地区は牧草地であり、現在も保存されている。今回の調査対象となった西側が遺跡の中心地と考えられる。

Ⅱ　調査経過

市道粕平石垣町線道路改良工事に伴う事前調査として、今回の調査を実施したものである。調査は平成６年７月４，５日の２日間の日程で行い、調査方法としては、トレンチ調査（２ｍ×170ｍ）１箇所を配した。表土剥離及び掘り下げに関しては重機を使用した。試掘の結果、表土約80㎝にて黄色の粘土層（地山）が確認されたが、遺構や遺物は確認されなかった。従って、開発予定地内には遺構、遺物は存在しないものと推測され、本調査を実施する必要はないものと判断される。ただし開発予定地内は遺跡範囲であることを充文に考慮、認識し、万一、工事の際に遺構、遺物が検出された場合は速やかに報告することを指示した。

以上が今回実施した開発予定地内の試掘結果である。道路の開通に伴って、今後増々、沿線の開発が予想され、試掘調査が増加すると考えられる。

今回の調査区は南北に長い範囲であった。南方から北方に行くにしたがって礫層が多く認められ、北側ではシルト層が確認されなかった。



第36図　大壇遺跡位置図

第７節　杢代遺跡

Ⅰ　遺跡の概要［第37図参照］

本遺跡は米沢市の東南部、万世町梓山字杢代地内の標高310ｍの山麓及び平地に立地する。南方を西流する梓川が扇状地を形成する扇頂部に当たり、沢から流れる沢水が小扇状地を形成し、なだらかな暖斜面が範囲と考えられる。

遺跡は地元の人々によって、かなり以前から知られていた。その後、昭和36年に宮坂善助氏、昭和44年に秦昭繁氏が試掘を行っている。その資料を加藤稔、佐藤庄一氏が発見して、縄文晩期末葉、弥生中期初頭の良好な遺跡であると結論づけている。昭和45年に杢代遺跡発掘調査団が結成され、予備調査を実施している。調査結果の一部は佐藤氏によって発表されている。

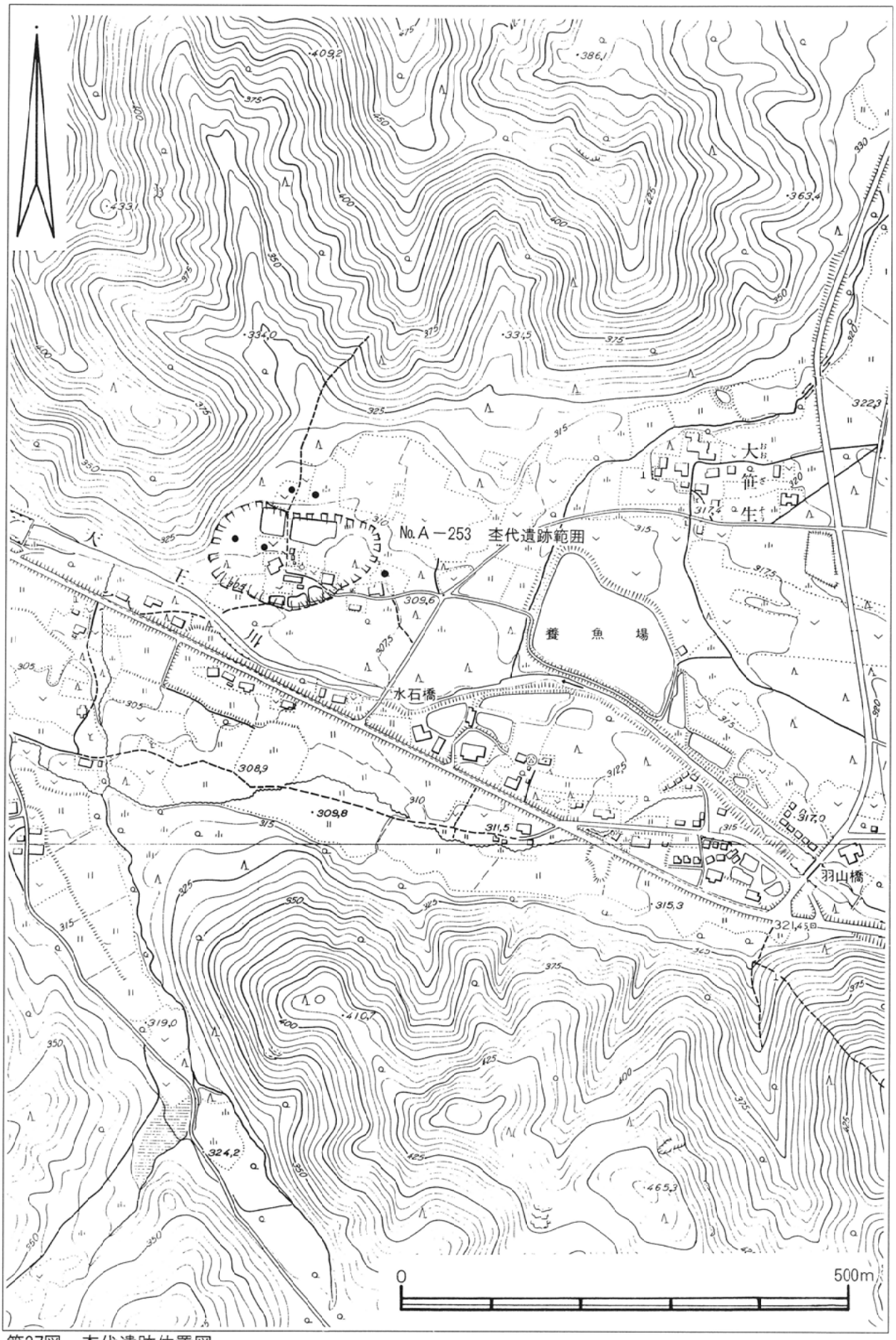
その資料によると、大半は大洞Ａ・Ａ′式に併行し、わずかに弥生時代中期初頭の土器群が含まれている。この中で特に注目されるのは、浮線網状文の存在である。この文様は亀ケ岡式土器の変形工字文と平行関係の中で発達した関東地方を中心とする土器群であり、相互の文化圏の接点を示すものといえる。

Ⅱ調査の経過

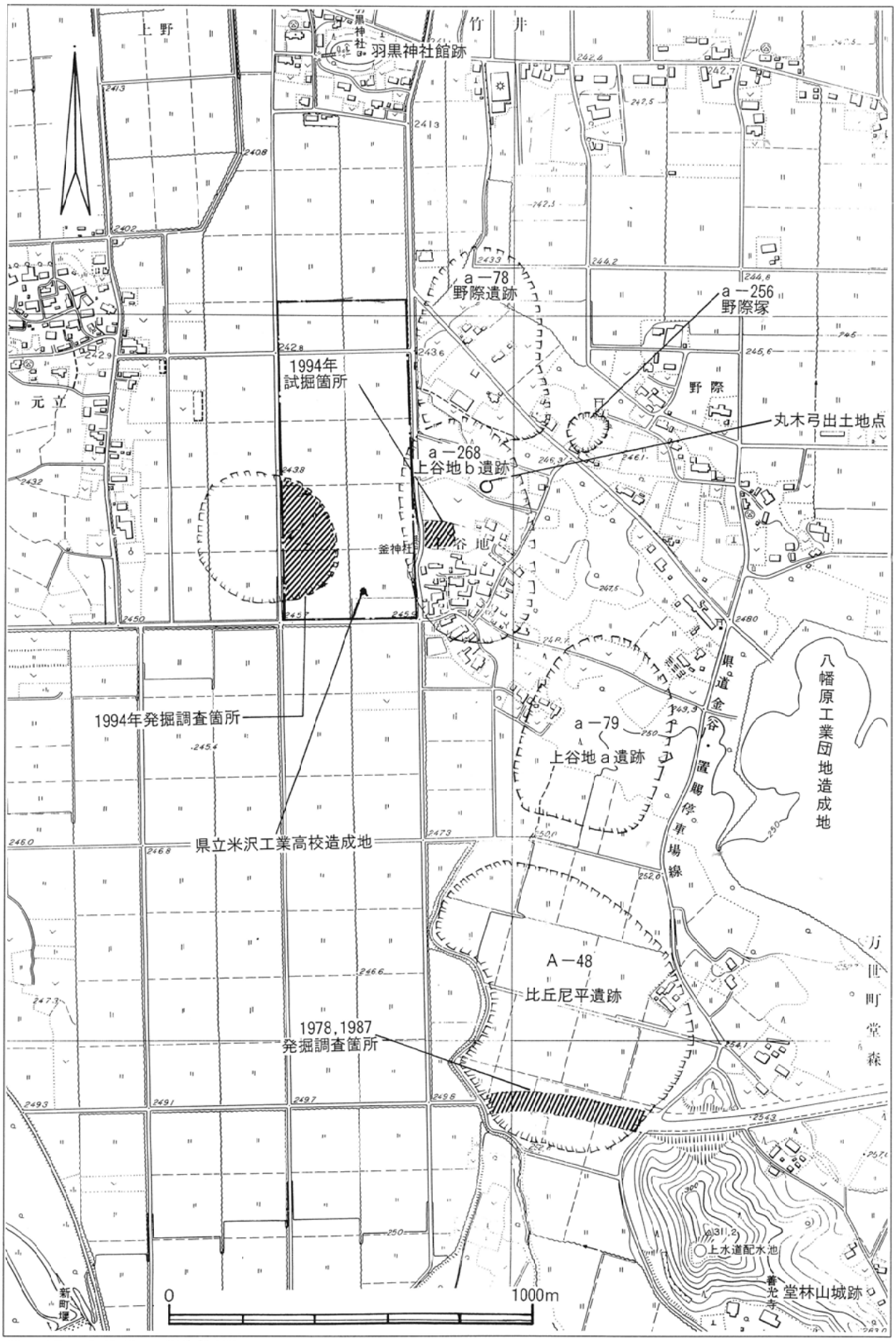
図で示す範囲について、平成６年８月29，30日の日程で試掘調査を実施した。黒丸で示した箇所が試掘坑を掘った地点である。先述した各氏が試掘した範囲は水田の基盤整備によって、変容している。

北側の沢の入口付近は、以前は畑であったが、現在雑草が茂る原野となっており、これらを除去してから試掘を開始した。層位は山砂が推積した状況であった。１ｍ位掘り下げたが、地山は確認されなかった。遺物も認められなかった。この地点でまで遺跡は広がっていないと判断され、今回の北側試掘箇所の手前が北方の範囲と理解される。

西方の遺跡範囲とされる現況は杉林で占められ、試掘が困難であったことから、手前の畑で実施した。この地点は耕作土に遺物が混入していたが、試掘坑からの遺構確認はできなかった。東方の試掘箇所からも、遺物及び遺構は確認されなかった。今回の調査では図示した範囲が遺跡の範囲と想定された。南方は現在、一部に池が掘られていた。地権者の方に現状の維持をお願いした。



第37図　杢代遺跡位置図



第38図　上谷地ｂ遺跡位置図

第８節　上谷地ｂ遺跡

Ⅰ　遺跡の概要［第38図参照］

梓川扇状地は八幡原周辺で末端部に達すると想定される。米沢市万世町桑山地区、金谷地区、堂森地区の西側を羽黒川が浸食し、比高差の著しい段丘を形成、やがて、上郷地区の上谷地、野際で終結をむかえる。この箇所は氾濫した梓川と羽黒川が合流する地域であり、そこに上谷地ｂ遺跡はある。

上谷地地区は、かっての八幡原湖、さらに梓川の旧支流が羽黒川と合流していた地点にも当り、現在の集落がある北側が掘状に凹み、前方には野際遺跡が隣接する。第35図に丸木弓出土地点と示した箇所の水田一帯が梓川の旧支流にあたる。これを裏付けたのが丸木弓の発見であった。

水田所有者で上谷地在住の太田孝一氏が井戸を新設する際に、秦　昭繁氏によって偶然発見された。一部欠損しているが保存状況は良好である。この発見により、本遺跡が注目されるに至った。最近では遺跡の西側一帯が県立米沢工業高等学校の用地として買収され、平成６年度から工事が着工されている。

これに先行して実施された、埋蔵文化財の発掘調査によって、図に示した箇所を山形県教育委員庁文化財課が調査を実施している。調査区からは、奈良時代、中世の遺構、遺物が出土した。担当者によると遺跡は西側に延びるという見解であり、以前は台地であったとのことである。水田の整備によって、台地が変容したとの解釈である。

図に示した比丘尼平遺跡の西方水田地帯には駅東線として、八幡工業団地内から延びる四車線の道路が東西に走る。この工事に伴なう調査として、３回の発掘調査を図示した範囲で実施している。

調査の結果、県内で初の方形周溝墓が発見された。この発見を機に当市でも次々と発見され、最近では白鷹町でも発見例がある。また図で示すように上谷地ｂ遺跡周辺には遺跡が隣接して、立地する特徴が認められる。遺物の表採や、調査の結果から、これらの遺跡群は縄文前期から同晩期、古墳時代、奈良時代、中世の時期が認められ、複合遺跡であることが判明している。

河川が合流する地点という好条件が、これらの各時期における集落構成を可能にしたと推測される。次に土塁が一部に残る館跡について述べる。

第36図に示したのが上谷地館跡の略測図である。南東コーナ部の土塁と堀が

現存する。西側の土塁については不明であるが、他の地点については現地の状況や伝承を総合すると、存在したのはほぼまちがいないと考えられる。

上郷郷土史には以下のように記してある。(上郷郷土史上巻406～407引用)

安部頼母を藤原秀郷の一族の子孫とする伝

上谷地は戸数13戸の小里であった。13戸の中、安部の姓は10戸、太田の姓は三戸であった。安部氏は藤原秀郷(？)の一族の子孫だと伝えられている。秀郷は江州三上の一蛇を退治して、お礼にもらった俵から俵藤太と伝われた勇将であった。俵をもらった時「毎月六日にさえ俵を聞けなければ、いくら米を出しても出し切れない」といわれておったのだが、ある時まちがって六日に俵を開けてしまい、それからは、いっこう米が出なくなってしまった。以下省略

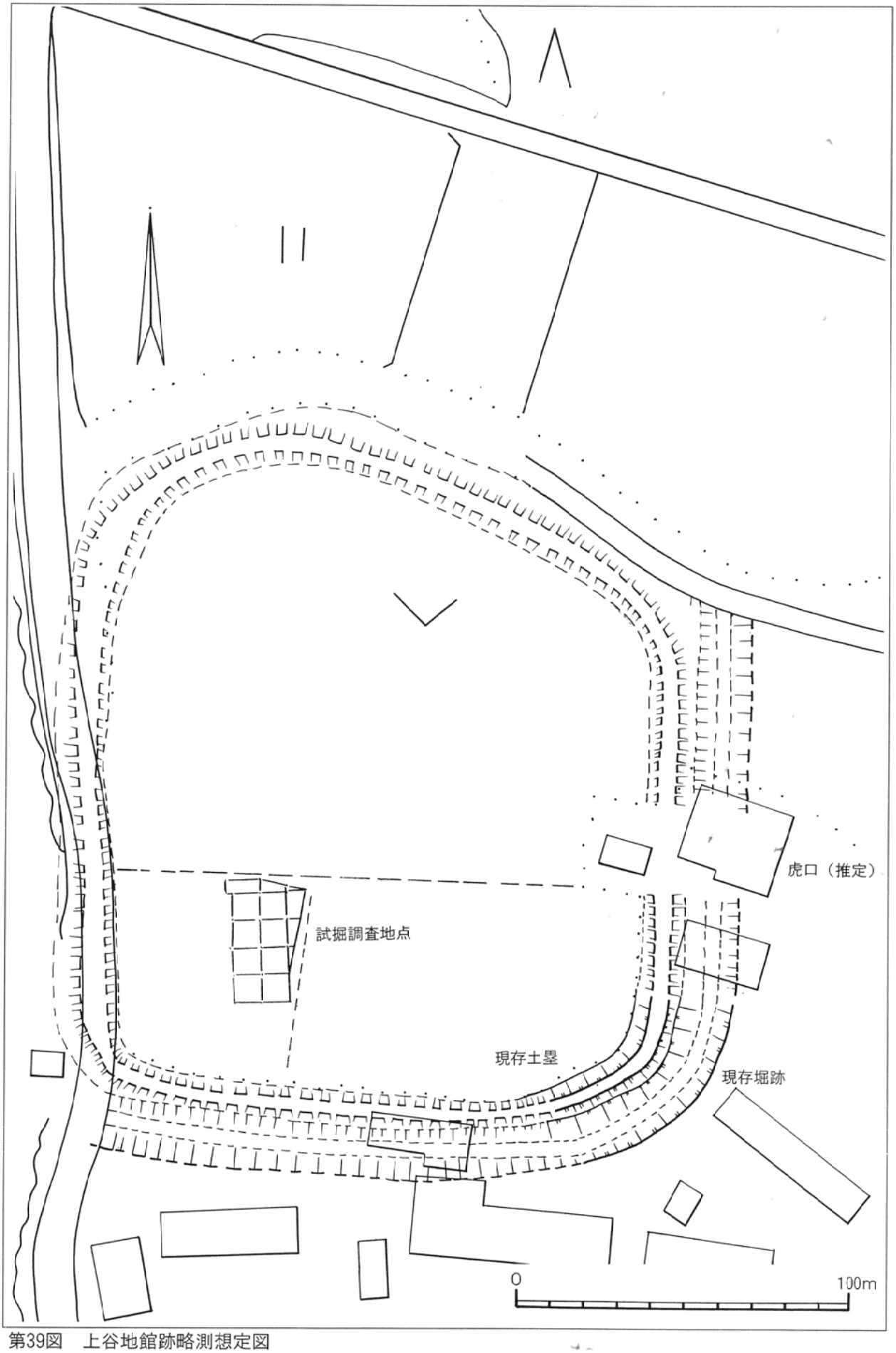
安部頼母を茂庭周防の嫡とする伝

安部成頼母は茂庭周防の嫡男で上谷地の安部家の先祖だとも伝えられている。父子別々に住む伊達家のならわしとして、周防は元立に（川井の館の山に住んでいたといわれるが)、頼母は上谷地に住んでいた。最初は親子の間になにもなかったが、頼母を廃嫡して後妻の子を世継にしようとしてからは、頼母の心もおだやかでなくなり逆心を抱くようになった。そのうわさが元立に知れ、上谷地打っべしとなった。その時、重臣植野市郎兵衛、たかが小童一人のことで戦いを交えるとはおだやかでないと、一人上谷地の館に乗りこみ、頼母に面会し、説得につとめた結果、理に服し詰腹を切って相果てた。年号はわからないが三月十八日早朝と伝えられる。遺臣ひそかに稲場の墓地に埋葬し、そこに建てたのが万年塔だという。

改易になり、半士半農でなくなり、農業ひとすじに生きるようになってからも、ひそかに供養を続け、うら盆の墓参も13日でなく14日の早朝にしたという。その墓が上谷地の南にあるといわれる。

以上が伝である。館跡は当市にも数多く認められるが、この様な伝を有する館跡は数例しかない。

今回の調査区は図に示した箇所であり、館跡の西南に位置するものと推測される。確認した遺構の詳細については後述するが、概要を述べると建物を区画した溝状跡を確認している。遺物としては内耳土鍋が出土している。溝状遺構の埋土からの出土であり、館跡の年代を示す資料といえる。出土遺物から言えば上谷地館の年代は戦国期に位置づけられ、後述した伝承と符合すると言えよう。



第39図　上谷地館跡略測想定図

Ⅱ　調査の経過

調査の期間は平成６年９月１日～同年９月22日、同年10月３，４日、同年10月17日～11月11日で、調査面積は580㎡である。調査は当初手作業による試掘坑から開始した。この作業は拡張区を選定するためのもので、９月中はこの作業に費やす。

10月17日に９月中に実施した成果を基に拡張区を設定、重機による表土の剥離を実施した。その結果、ピット群や溝状遺構のプランを確認した。この作業に２日間を要した。面整理作業も併行して進めた。

10月30日には親子発掘を本遺跡で開催し、ＫＹ３を掘り下げた。11月４日からは、ピット群を半裁して柱痕跡の確認を実施した。また半裁したピット群のセクション図作成も併行して実施した。さらに館跡の略測図も作成した。11月９日までに、写真撮影や平面図作成を終了し、11月10日，11日の両日は埋め戻しを実施する。今回の試掘調査区は、黄褐色のシルト層が地山であり、遺構は確認しやすい状況であった。中世が主体をなす調査区であることから遺物の出土数はきわめて少ない。

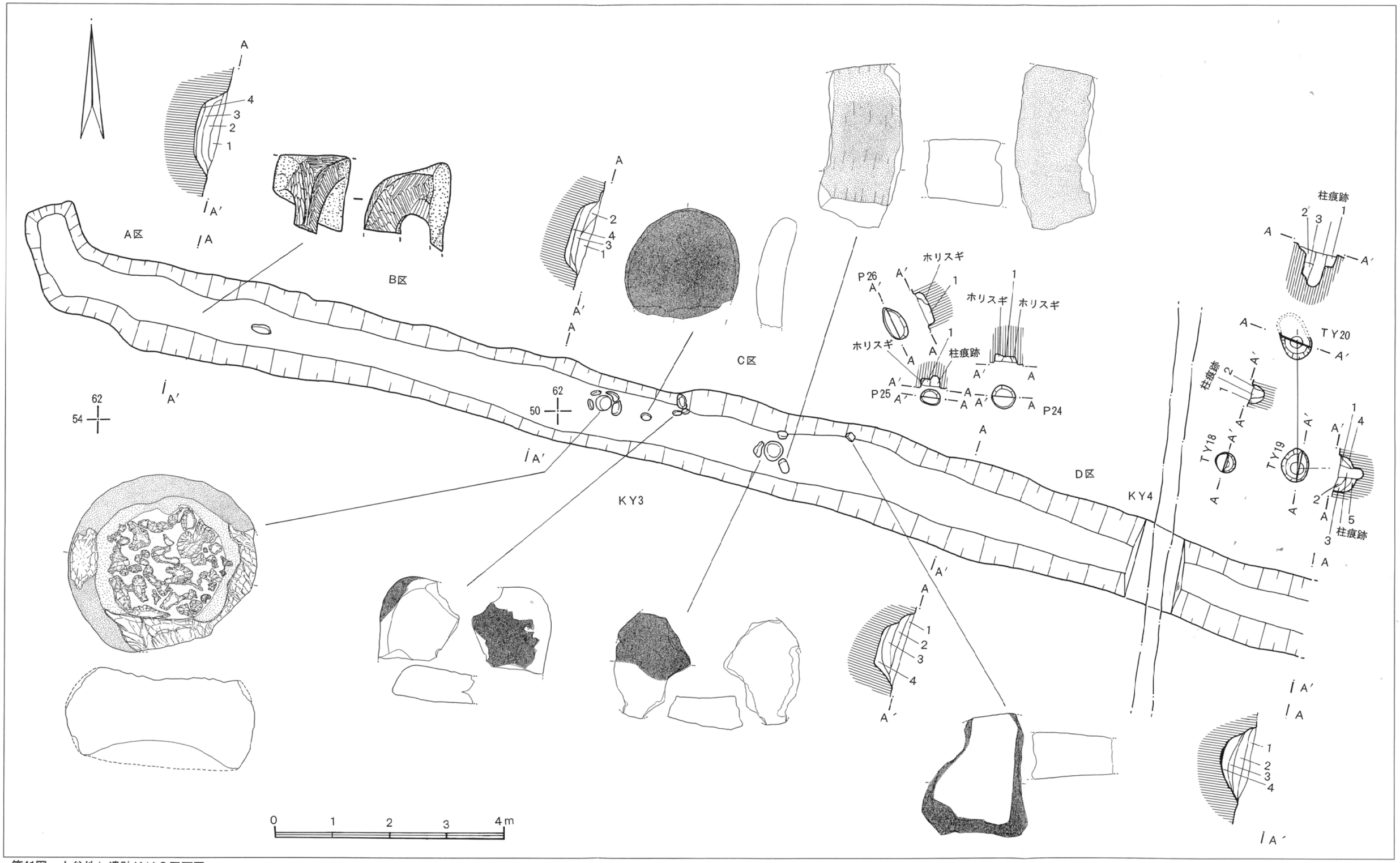
Ⅲ　検出遺構［第40図参照］

第37図に示したのが、今回の調査区から確認した遺構の全体図である。ピット群Ｐ１～Ｐ17、Ｐ21～Ｐ26、柱穴跡ＴＹ18～ＴＹ20、溝状遺構ＫＹ１～ＫＹ３、土壙ＦＹ１～ＦＹ４の総計31基であった。

分布状況を見ると、ピット群はＫＹ２の南方箇所に集中し、柱穴はＫＹ３の北東部に集中している。ＫＹ１とＫＹ２の中間にはピット群や柱穴が存在しない状況を呈する。確認した遺構群は分布状況の吟味や埋土から判断して、中世及び近世に位置する遺構群である。これらの遺構群について、列記した順に説明を加えたい。

・ピット群［Ｐ１～Ｐ17、Ｐ21～Ｐ26］

平面形状が円形、楕円形を呈する形状をなす。深さは10㎝～20㎝を有し、楕円形状を有するピットは浅い。埋土は一層から二層であり、遺物は認められなかった。柱痕跡も認められず相互の関連性も認められなかった。埋土は黒褐色土層であり、溝状遺構の埋土と類似することから中世のピット群であろう。



第41図　上谷地ｂ遺跡ＫＹ３平面図

・柱穴跡［ＴＹ18～ＴＹ20］

第38図で示すように明確に柱痕跡が確認できた。ＴＹ19、20は平面形状が楕円形状を呈し、深さはＴＹ19が40cm、ＴＹ20は50cmを測る柱穴跡である。ＴＹ19、20は埋土が同一であり、掘立柱立建物を構成する一部と考えられる。間尺は南北1.2m（４尺）を有し、東方と南北に延びる。ＴＹ18は平面形状が円形を呈し、深さは20cmを測る。埋土が異ることから判断して、ＴＹ19、20と関連しない柱穴と考えたい。

・溝状遺構［ＫＹ１～ＫＹ３］

ＫＹ１、２は同一間隔で東西に走る溝状遺構である。幅は平均60cmで地山を掘り込んで構築している。深さは40～50cmを測り、底面に小ピットを有すのが特徴である。埋土は人工維積状況を呈し、セクションに柱痕跡が認められたことから、杭列を有する溝状遺構と解釈される。

溝状遺構の空間に遺構群が存在しないことから道路と判断される。内耳取手を有する土鍋が出土したＫＹ３と同様な埋土であることから、３基の溝状遺構は館跡に伴なった同時期の遺構群である。埋土からは礫が出土している以外は認められなかった。

ＫＹ３は幅が平均1.3mを測り、西端部で「Ｌ」字形に北方に曲がる。この箇所は幅が１ｍとやや狭くなる特徴を呈する。深さは40～50cmを測り、壁はゆるやかに立上がる。従って、断面形態はレンズ状を有する。

第38図に出土した遺物、出土地点を図示した。この図で示した以外にチップ２点、石箆状石器２点があるが、縄文時代の遺物であることから割愛した。

埋土は人工推積状況を呈し、地山の土と黒褐色層の混合層が主体をなす。出土した遺物は、すべて破片であり、溝が機能を失しなった時点で投げ捨てられた痕跡を示している。

底面に認められる少量の砂は、雨水等によって流れこんだものと解釈されることから、この溝跡は空堀として利用されていたと考えられるのが適当と推測される。ＴＹ18～20の存在から考慮すれば、この空堀は住居と広場を区画する目的で構築されたものであろう。また、四方箇所が「Ｌ」字に曲がることは入口のひとつとして、利用したことがうかがわれる。

・土壙［ＦＹ１～ＦＹ４］

ＦＹ１は不整形を呈する平面形状で、ＫＹ１を破壊して構築している。土を採掘した跡と考えたい。他の３基の土壙はゴミ捨穴で、いずれも近世に位置する。

Ⅳ　出土遺物［第42図～第45図参照］

今回の調査区から出土した遺物の総数は71点である。他に昭和60年（1985）度に太田孝一氏の水田から秦　昭繁氏によって採集された遺物の一部も図化した。

平成６年度の調査区出土遺物は縄文土器片、古墳時代の土師器、中世の陶器片、土師質土器片、近世の陶磁器、縄文時代の石器、中世の礫群に大別される。

太田孝一氏の水田からは総数135点の遺物が出土している。すべて縄文時代晩期の大洞ＢＣ式に併行する遺物群であり、細別して述べると、剥片21点、磨斧１点、土器片107点（24点拓影図作成）、環状土製耳飾り（破片）１点、石皿１点、磨石１点、丸木弓１点となる。年代別に分けて説明したい。

・縄文時代［第39図、第40図１～７、第41図１・２、４～８、第42図参照］

土器、石器、礫器、木器、土製品に細別し、列記した順に述べたい。

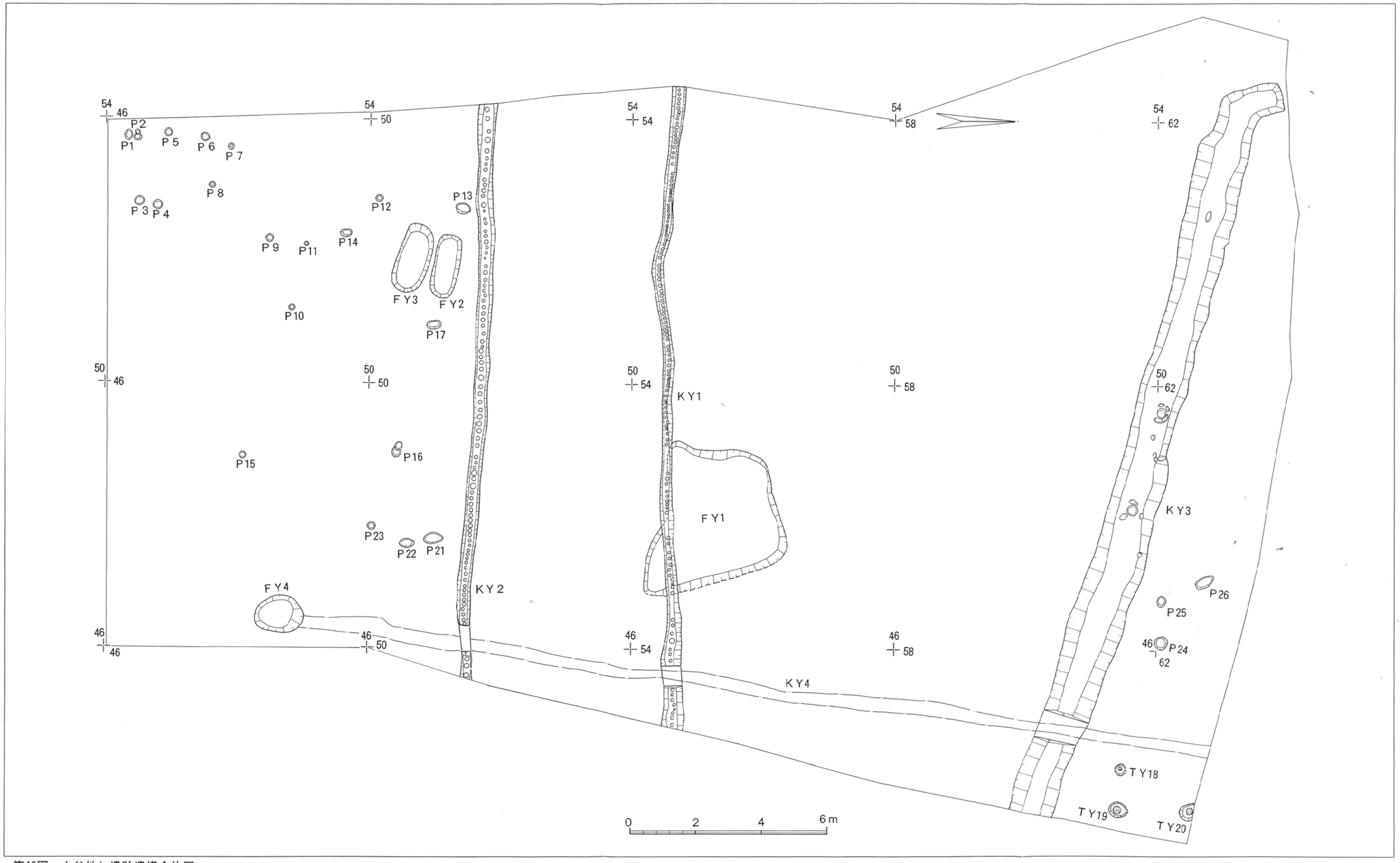
調査区からは55点出土している。遺構に伴なうものは一点もなく、すべて耕作土や中世の遺構に混入したものである。小破片であるため、拓影図を作成したのは第４３図２の１点だけである。小破片の中には縄文前期の破片も認められ本遺跡は縄文前期と同晩期が複合していることが判明した。図化した土器片は縄文晩期の浅鉢形粗成土器の口縁部片であり、ＫＹ３の埋土から出土した。

第42図、第43図１、３～７は太田孝一氏の水田から出土した土器群で、壺形土器、浅鉢形土器、小型土器、台付土器の破片である。文様は羊歯状文や三叉文が認められる。

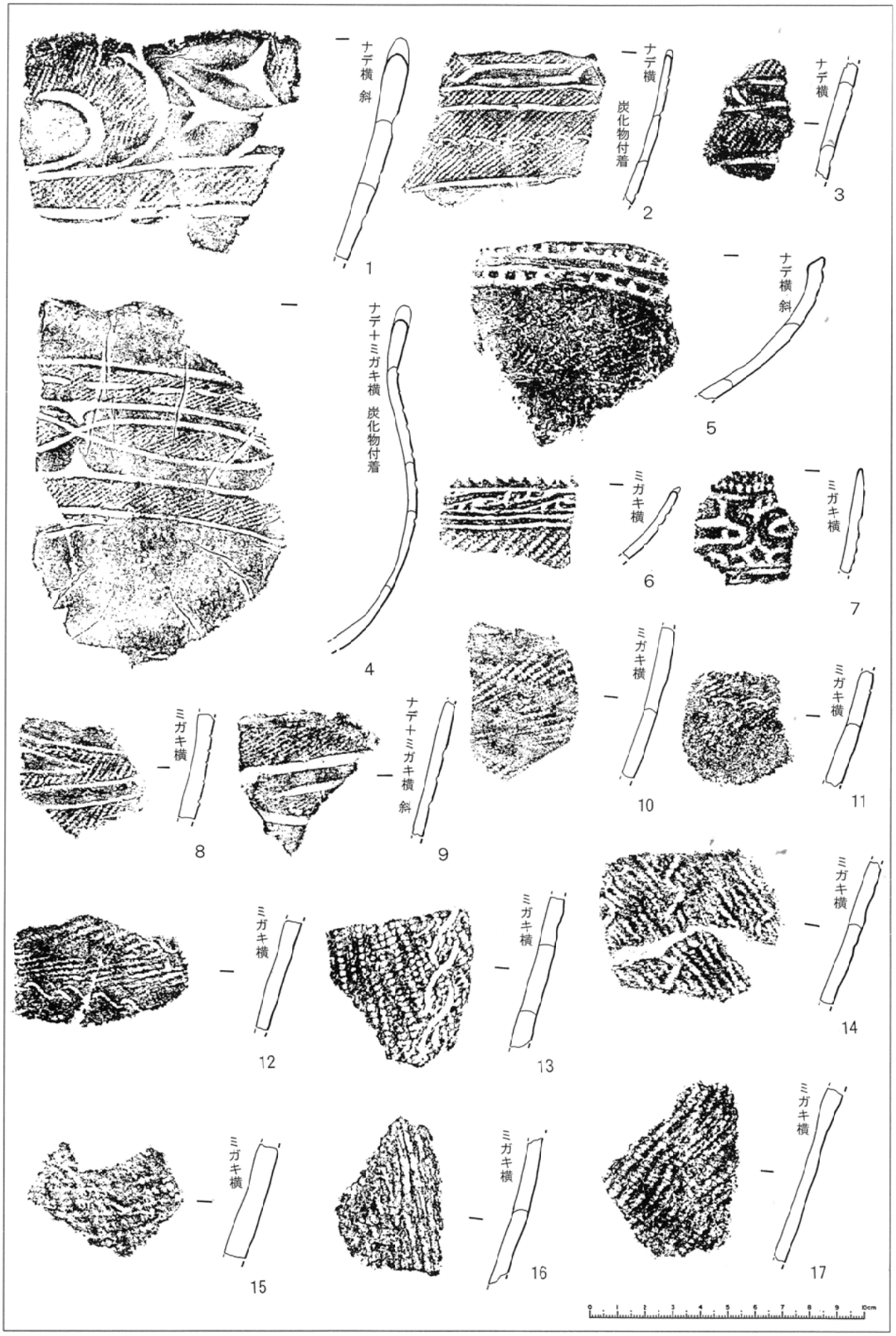
石器は第44図１～７である。すべて、今年度調査区出土であり、同図１、２は石鏃、３は石製品、４は打製石斧、５、６、７は石箆状石器である。縄文時代の各時期に認められる形態であることから、今回の調査ではどの時期に位置するかは明確に言えない。

礫器としては第44図８の凹石が今回の調査区から出土している。安岩石の川原石を使用しており、両面に凹部を有する態である。

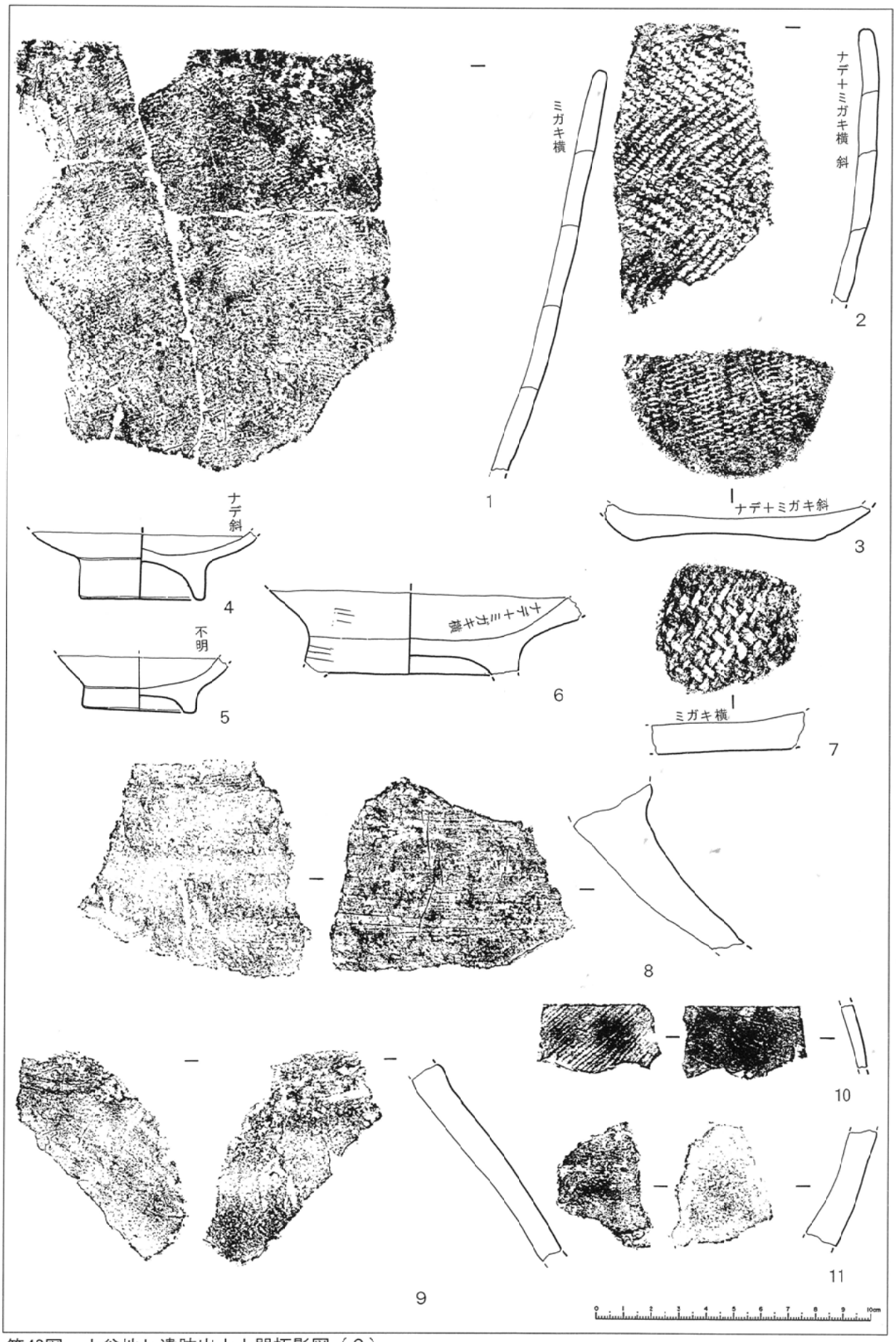
木器は第45図の丸木弓がある。現長で79.2cmを測り、中央部には桜の皮を巻き付けた痕跡が認められる。弓全体に黒色化した漆の痕跡を残し、弓筈が明瞭に残っている。材質は杉と考えられ、復元すると図示した形態を呈すものと想定される。



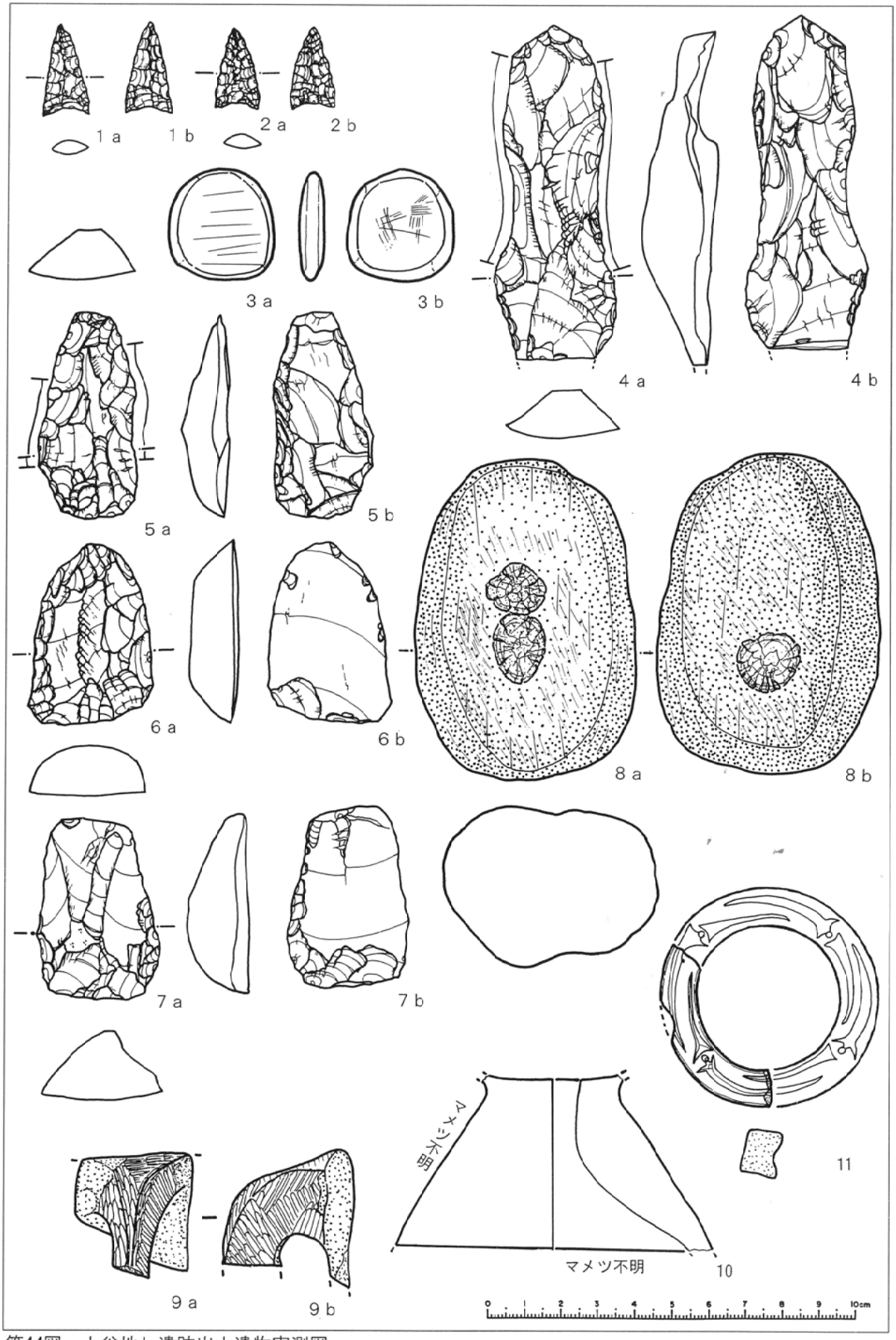
第40図　上谷地ｂ遺跡遺構全体図



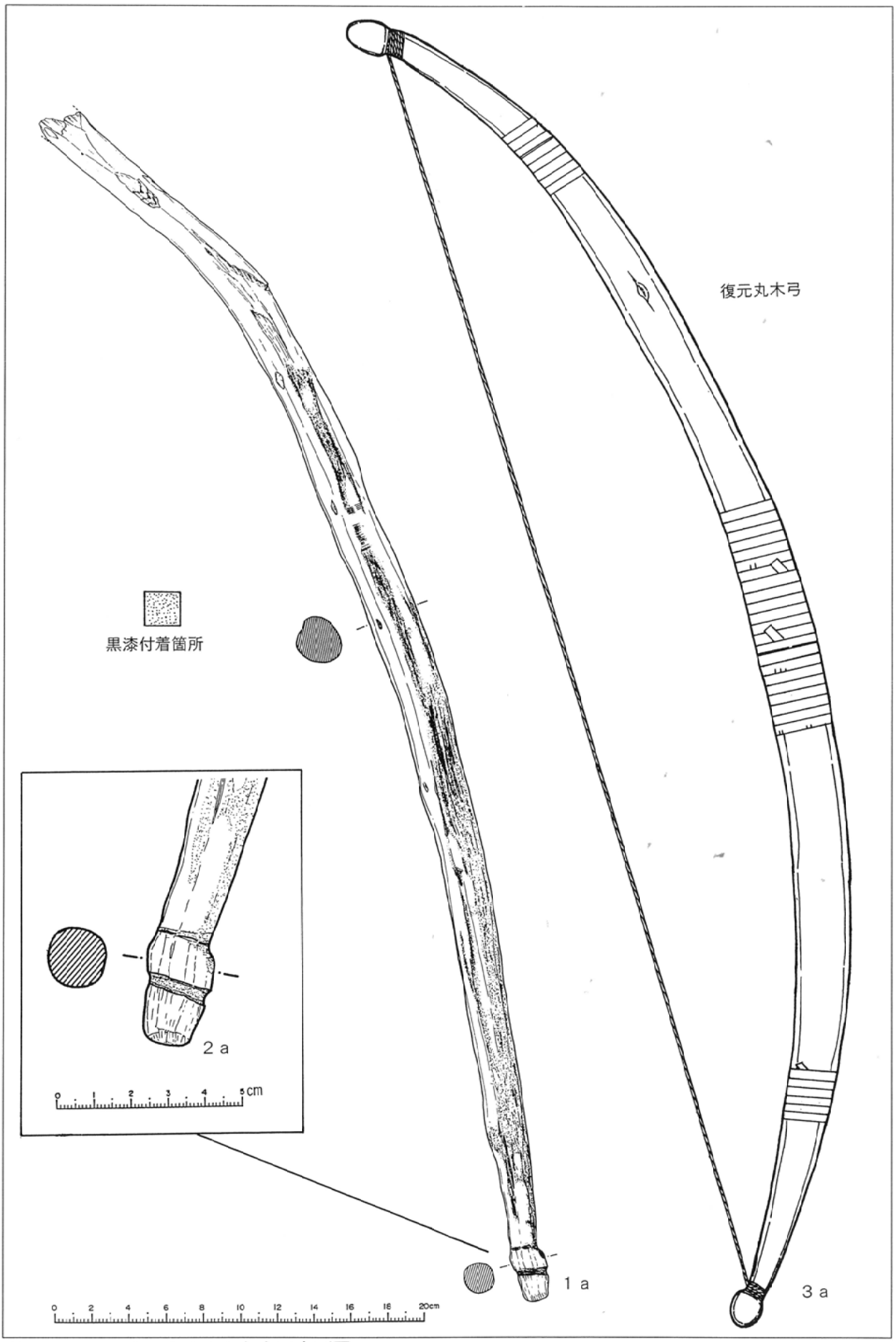
第42図　上谷地ｂ遺跡出土土器拓影図（１）



第43図　上谷地ｂ遺跡出土土器拓影図（２）



第44図　上谷地ｂ遺跡出土遺物実測図



第45図　上谷地ｂ遺跡出土丸木弓実測図

土製品としては、第44図11に作図した環状土製耳飾りがある。水田からの出土であり、全体の約３分の２が欠損しているが、復元して図示した。入組三叉文をモチーフにした文様構成であり、断面形態は中央が凹部を有する。当市では最初の発見となる。

◦古墳時代〔第44図10〕

２点出土している。図化した他に椀形土器の破片がある。この時代の遺構は今回の調査区からは確認されていないが、本遺跡にも古墳時代の遺跡が重複すると考えられる。第44図10は器台である。磨滅が著しく、調整痕は不明である。

◦中世〔第41図、第43図８～11、第44図９〕

中世陶器の破片第43図８から11の４点、第44図９の内耳取手の土鍋破片、第41図に示した焼成面を有する礫５点、同図の五輪塔「風輪」部片が出土している。中世陶器は珠州焼系の特徴を有する。甕形土器の破片と推測される。内耳土鍋は破片であるため器形は明確でないが、内耳から判断して、器高の低いほうろくと考えられる。年代は戦国時代（16世紀代）に否定されている。

内耳土鍋が本市で最初に確認されそのは上郷地区上浅川遺跡第１次調査区からであった。その後、中田町大浦Ｃ遺跡からほぼ完形な土鍋が出土し、内耳取手が３単位であることが判明している。

内耳土鍋は米を煮る器として、羽釜消滅後にそれに変わるものとして出現したものと思われる。羽釜について詳しく検討した資料はないが、長野、山梨、群馬、栃木、埼玉県北部に主に分布は限られ、その時期は10世紀～12世紀後半までだという。それ以外の地域については不明である。ところで「カマドから炉への推移は東国にあっては中世」といい、更に中世にあって厨房具に炊飯用の釜がないという。これらは民族学では定説であるという。

すなわち、古代にあってはカマド＝羽釜ということになり、中世にはいると間もなく炉(囲炉裡)＝内耳土鍋という公式を与えることができるかもしれない。

年代、使用方法についての論考は中村倉司氏の論文から引用させていただいたことを記しておく。

焼式面を有する礫群はすべてＫＹ３の底面や埋土から出土したものである。スクリントンで示す箇所には炭化物が付着している。この様な礫は欠損面を有すのが大半であり、用途は不明である。出土列としては前述した、上浅川遺跡や大浦Ｃ遺跡にも認められた。上浅川の場合は柱穴の底面に柱の土台石として配された状況であった。本遺跡でも同様な使用方法が考えられる。

第46図　米沢市東方の主要館跡位置図(略測図の番号で示した)

V　まとめ

試掘調査区は中世、太田孝一氏の水田は縄文晩期がそれぞれ主体であることから、本遺跡を縄文時代、中世と分けて述べ、まとめとしたい。

・縄文時代

上谷地ｂ遺跡は縄文前期、晩期が複合している。遺跡の中心としては、今回の調査区の北方周辺と推定され、段丘下の水田地帯が包含層（遺物の捨場）と解釈される。包含層は湿地帯であり、木器等の遺物が埋没していることは丸木弓の出土が証明している。

縄文時代の弓は全国で縄文晩期、後期を中心に約50点が発見されており、形態的には丸木弓、弓筈に彫刻を施こした飾り弓、発火具に使用したと考えられる小形弓の三形態に分類される。材質はカヤ、アカマツ、イネガヤ、ヒノキ、クリ、などを使用しているものが多い。

上谷地ｂ遺跡の弓は丸木弓に分類され、類例として、岩手県萪内遺跡（後期）・滋賀県滋里遺跡（晩期）がある。形態は異なるが最古のものとして福井県島浜貝塚（前期）がある。山形県内では奈良時代のものとして川西町道伝遺跡、米沢市上浅川遺跡出土があるのみで、縄文時代のものは本遺跡出土の弓が唯一である。

弓などの木器類が出土する遺跡は周辺に湿地帯を有する限定された遺跡であり、現在確認されている遺跡群の中では、上谷地ｂ遺跡が木器類を出土する数少ない遺跡の一つとして注目される。

・中世

第43図には米沢市東方の主要城館跡位置図、第44図には米沢市東方の主要館跡略測図を示した。これらは現在する館跡であり、他にも土塁が削平されたり、堀が埋められたりして、地上から消滅してしまい、確認できない館跡もあるので、ここに記した数以上に、館跡があることを念頭においてもらいたい。

これらの館跡は歴史的な背景の中で構築されたもので、時間的流れの中で存在したものと考えられる。

第44図に示した中で最も古い時期に位置づけられるのが５の木和田館である。この館跡は米沢市大字木和田字中曽根に所在する。西側を除く、三方を山麓に囲まれた入江状の低地を母体にして、館跡は南山麓に接して存在する。

主軸長をほぼ南北方向に置く館は、土塁と堀跡からなるもので、東側に虎口

有する「単郭」式の平城である。平面形状は山に面した方が台形を示しており、東西62mを南北40mを測る。堀の形態は東西が薬研堀、南北が箱堀を有する。

昭和61年に測量と一部発掘調査を実施している。調査は北の土塁と土塁に面した約100㎡を対象とした。発掘調査の結果、洗い場と考えられる小規模な池状遺構と館内の排水のために設けられた溝２基が確認された。

遺物は甕形を主体とした須恵器系土器と珠州系土器、土鍋が供存して認められ、12世紀後半から末期に位置づけられる。館主は数町程度の所領と僅かな郎党を従えた小地主である名主的武士層の館と川崎利夫氏は推測している。

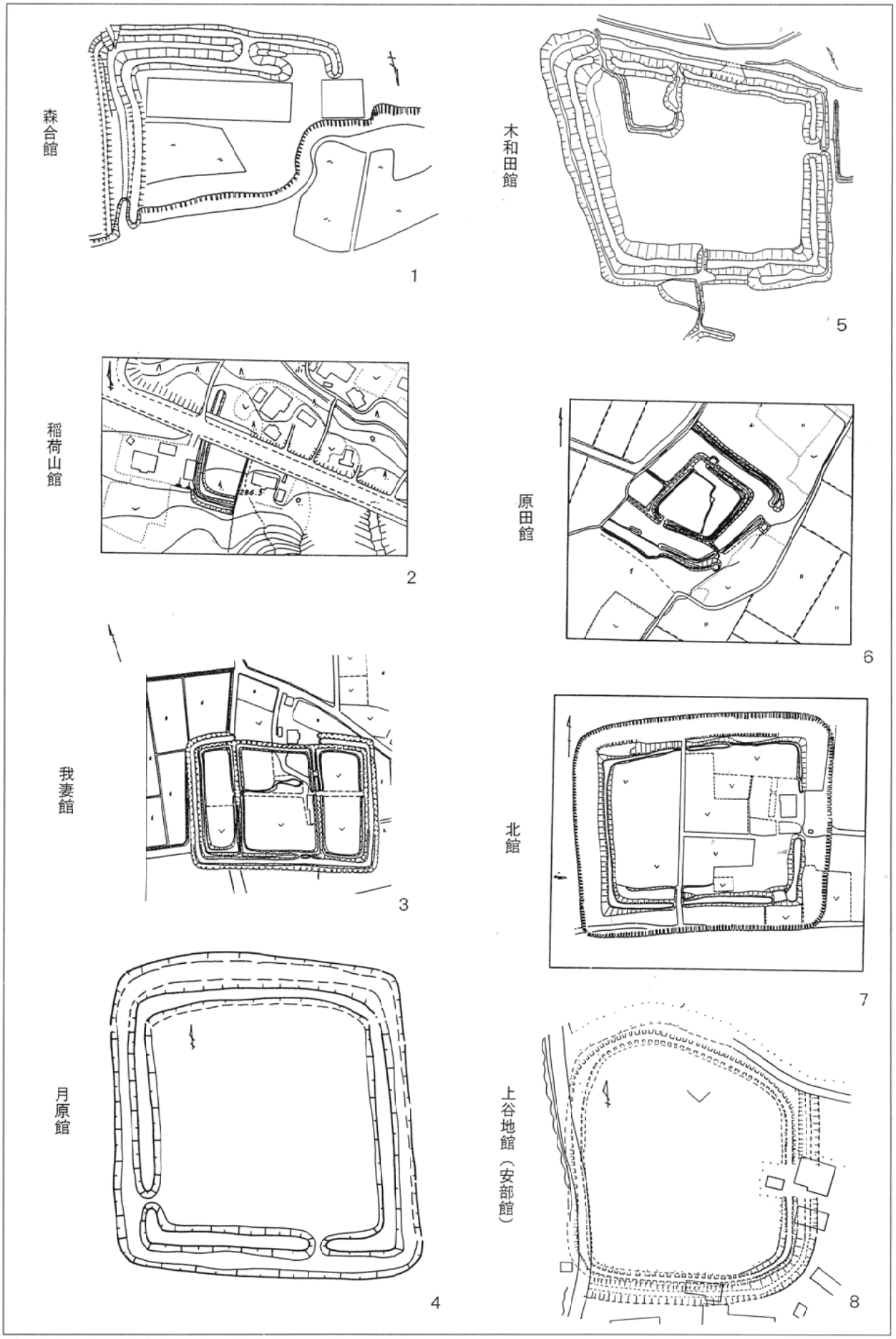
鎌倉武士が地頭として各地に所領をもち、地頭領主として地域に勢力を持ちはじめたのは13世紀も半ば過ぎてからである。出羽南半にも長井氏、大沢氏、安達氏、二階堂氏、三浦氏らの一族の下向を伝える。木和田館はそれより１世紀遡るものであり、当市における館の出現期に位置づけられる。１、２、４、７は木和田館より時代は下がると考えられるが、前面に水田が開ける景観を有する場所に立地しており、農民的性格の強い武士層であることが伺える。

前述した、鎌倉武士団の進出は当地における、館の存在を変容したと考えられる。すなわち、山寄せに構築していた館を、平地に築くことにより、武力を誇示する手段として用いたと推測される。これに併なって、平地の館として備えた軍事施設の山城を構築する方向が生じてきたものと理解される。しかし、２の稲荷山館に伴なう小規模な山城も発見されており、いちがいには言えない要素も含んでいる。

上谷地館は立地、形態、出土遺物から戦国期に構築された平城といえる。現在は東南部に土塁、堀跡が残存するだけであるが、地元の伝承や現地調査から想定して、第36図に略測想定図を作成した。東西200m、南北210mの規模を在する平城と考えられる。

現在す土塁の上場で５m、下場で15m、堀の幅15mを測り、当市では大型の平城に位置すると考えられる。なを、西側の土塁については、存在しなかった可能性もある。虎口は図に示した東方箇所と推定され、周辺の様相から、桝形を呈していたもと考えられる。

城主としては、戦国時代に当地を支配していた。伊達氏の家臣である。鬼庭一族であろう。北西にある館山（川井山）には山城の遺構が残っており、また西方には元立（元館）の地名ものこる。館山の西方直下には、鬼庭一族の菩堤寺であった桃源院は現在も地元の寺として現在している。



第47図　米沢市東方の主要館略測図（縮尺不同）

第９節　我妻館跡

Ⅰ遺跡の概要

本遺跡は、米沢市万世町堂森字野中他に所在している。標高311.2mの堂森山の南東に位置するもので、主軸方向をやや東に傾いた方形の館跡である。この我妻館跡一帯は、米沢市内でも有数な遺跡が多い地区であり、大清水・柿の木・二夕俣Ａ・八幡堂遺跡の縄文時代の遺跡や、原田館・堂森山館などの中世の遺跡も数多く分布している。

本遺跡は、昭和60年の分布調査で確認されたもので、旧我妻氏の宅地及び田畑を囲むように、土塁と堀が廻っている。大部分は、市道や田畑の耕作によって破壊されているが、南側と西側の一部が良好に残存しており、長方形を有する平地型の館跡として中世の城館の成立を考える上でも貴重な遺跡として注目されてきた。城館跡は、大半が我妻氏の宅地に存在することから我妻館と命名した。

今回の調査は、平成６年４月18日から同年７月15日にかけて宅地造成の開発に係る緊急発掘調査として既に実施した我妻館関連の宅地造成に係る市道への取付道路敷部の調査として実施した。

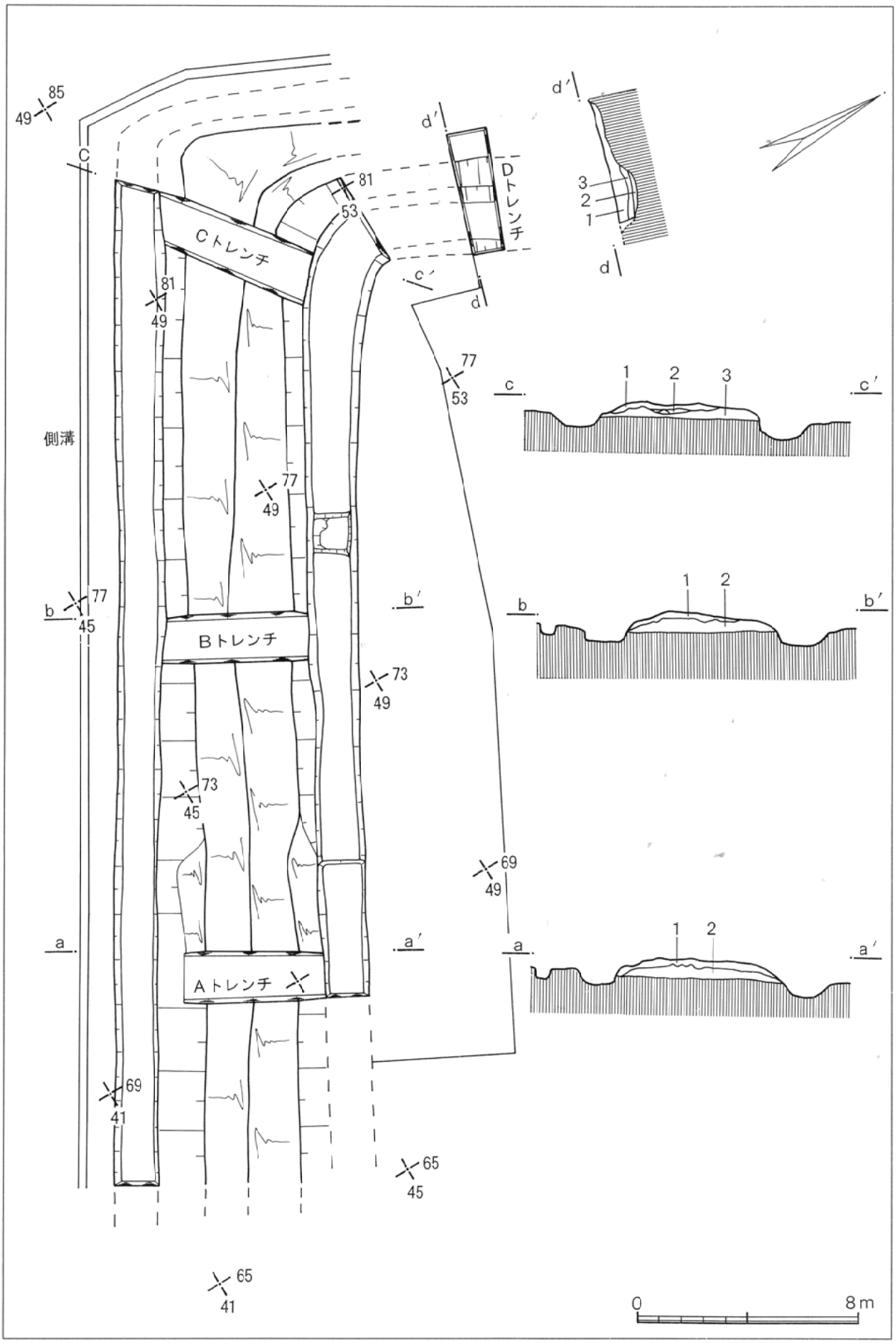
この宅地造成に伴う私道新設は、初期の宅地造成計画にはなかったものの、道路の直線化等、都市計画法令等の行政指導により、私道を新設し拡張することから調査を実施したものである。我妻館跡南西コーナー部一角にあたる。

Ⅱ　調査の経過

今回の調査対象は、開発予定地全域にあたる300㎡であり、第１次調査に隣接する西側部分であり、第２次調査として平成６年10月18日から開始した。

発掘試掘は、残存する土塁に４箇所のトレンチと表土剥離を重機で実施した。次の10月19日から面整理、遺構確認の精査を進め、10月22日からは並行して土塁の面整理と堀の掘り下げを開始した。10月23日には、遺構（土塁）の確認をほぼ終了した。この掘り下げによって、堀のコーナー部がほぼ直角に北側に延びることが確認された。引き続いて10月25日から平面図・セクション図、適宜写真撮影を行い、10月28日現地調査を終了とした。

第48図　我妻館跡位置図



第49図　我妻館跡遺構全体図

Ⅲ　検出遺構

今回の調査区、本館跡の南西側のコーナー部に位置している。調査区は小範囲であったため、検出した遺構は土塁と堀跡（内外）のみである。

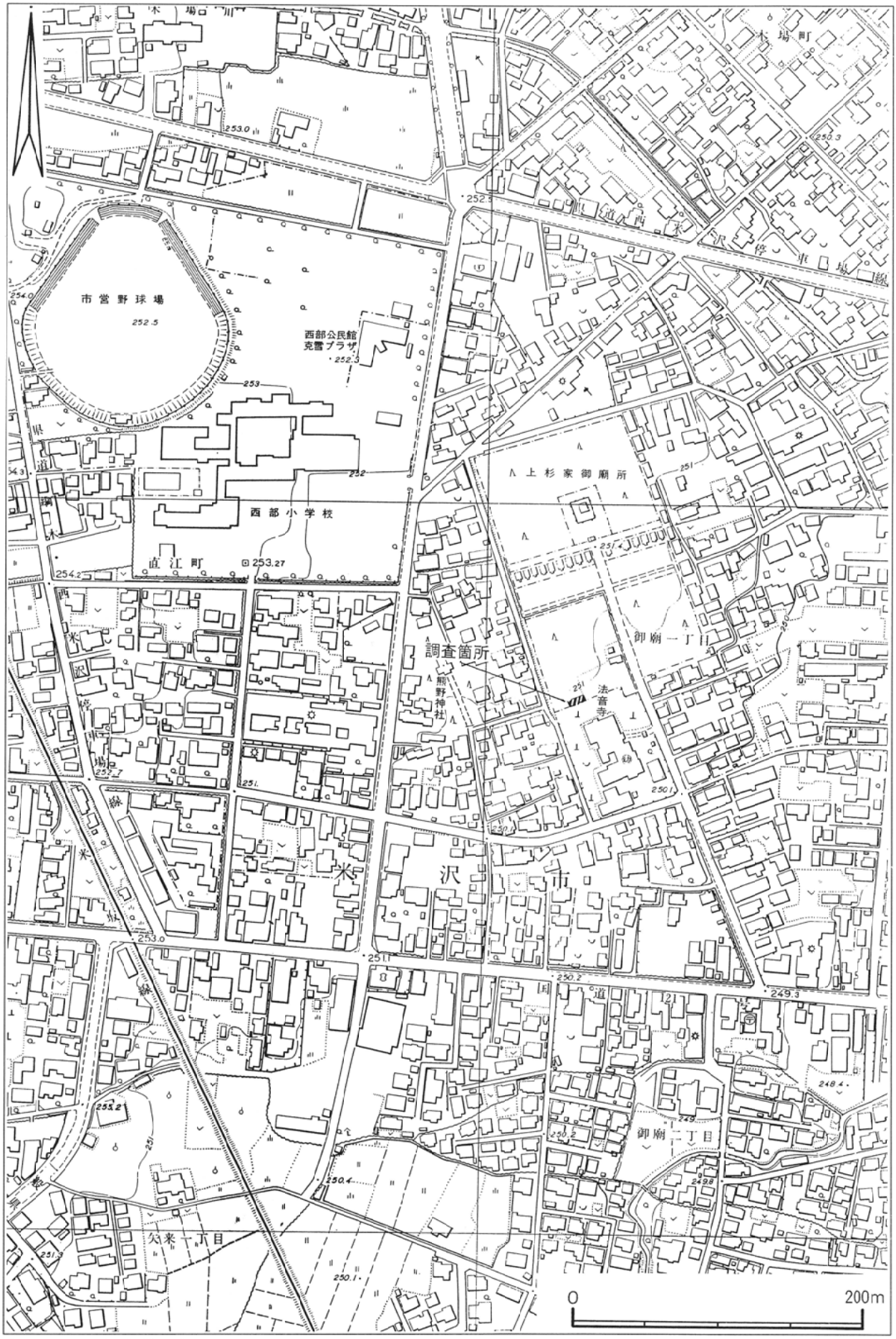
土塁の規模は確認長40m・幅３～４ｍ・版築層高さ70～80cmを測る。土塁の土層断面は、暗褐色シルトからなる２ないし３層の版築が確認された。この土塁は両堀の土を盛土したもりと判断される。版築層から遺物は出土していない。

土塁の南・北側には本館を外周する内堀と外堀が確認された。外堀の立ち上がる南側部分は調査区範囲外であることから確認していない。内堀の規模は、確認長45m・幅1.7～2.5m・深さ60～85cmを測る。Ｂトレンチ北側には障子堀の痕跡が確認されている。堀跡からの遺物は出土していない。

Ⅳ　まとめ

米沢市には山城、平城を含め約200箇所の中世城館館が確認されている。城館跡に関する発掘調査は、本遺跡以外では昭和58年の木和田館跡など、今日まで６遺跡を数えるが本格的な発掘調査はのは初めてである。本館跡は長方形を有する複障式の平城で、中心に本丸、左右に二の丸を配した特異な形態を呈しており平城の成立と発展を研究する上で注目される。また、本館跡の周辺には中世の遺跡も数多く分布している。中でも北東250mに二の丸を配した方形館跡の原田館、北西側200mに突出した堂森山の尾根には、帯曲輪とテラスで構成する堂森山館が存在している。原田館はその形態から16世紀前半から中頃、堂森山館は本館跡南約１kmに存在し早坂山館型を有していることから概ね15世紀後半頃と考えられている。

本遺跡は第１次調査で出土している土鍋などから15世紀前後の範疇に判断され、原田館・堂森山館などの時期に近いことから、密接な関連を有していた可能性がある。特に堂森山館とは隣接しており、平城（居城）に伴う山城とすることも指摘される。さらに注目されることは、内堀部分が障子堀を呈していることである。障子堀は主に関東地方にみられる手法で北条氏の代表する工法とされてきたが、各地で同様な遺構が確認され、一応に限定することは疑問視されている。本市をはじめ置賜地方には県内でも中世に属する城や山岳信仰に関連する塚群が数多く存在しており、今回の我妻館の調査は意義深いものである。



第50図　上杉家墓所位置図

第10節　史跡米沢蕃主上杉家墓所

Ⅰ　遺跡の概要

米沢市街地の西方部に位置する。南北約189m、東西約116mを測る範囲に史跡米沢蕃主上杉家墓所がある。南方部には法音寺が隣接する。周囲に空堀を巡らし、境内は歴史の流れを今に伝える雰囲気を呈する。

現在の配置は中央の奥に謙信公、謙信公を境として西方に初代景勝公、三代網勝公、五代吉憲、七代宗房公、九代治憲公、顕考公、十一代斉定公、東方には、二代定勝公、四代網勝公、六代宗憲公、八代重定公、十代治広公と並んでいる。

国指定史跡「米沢蕃主上杉家墓所」の修復計画に伴う基礎資料を得る目的で米沢市教育委員会が主体になって、上杉家管理事務所と協議のうえ、昭和62年の１次調査、昭和63年の２次調査、平成３年の３次調査として、過去３回実施している。トレンチ調査を主体として、主に空堀を対象に実施した。トレンチは８箇所に配して実施した。

Ⅱ　調査の経過

今回の調査は公衆トイレ新設に伴なう発掘調査として、平成６年11月21、22日の日程で、第47図に示した箇所を対象として実施した。現地は杉の立木があるため、伐採から開始した。伐採に関しては業者の方にお願いした。

伐採終了後、重機による表土剥離から始めた。木の根は下層の遺構に配慮して、そのままにして、周囲の手作業によって掘りさげた。平成６年度は雨量が少ないこともあり、表土はサラサラした土質であった。表土は約20cmと浅く、下層は整地層と判断された。表土剥離後、精査を実施したが、遺構、遺物等は検出されなかったので、さらに整地層を少しづつ掘りさげていった。整地層は約30cmであり、地山はシルト層、黄褐色土であった。

この層からも、遺物、遺構等は検出されず、調査は一日で終了した。次の22日、木の根をヌキ取るとのことであり、万一を考えて、立会い調査とした。その結果、シルト層の下層は礫層であった。なを空堀は今回の調査区南方箇所に位置すものと推測される。

参　考　文　献

1964（昭和39年）　中村忠雄　米沢大年表

1972（昭和47年）　土曜考古　創刊号　土曜考古学研究会　中村倉司　内耳土器の編集とその問題、15頁～24頁

1979（昭和54年）　上郷公民館　上郷郷土史（上巻）

1983（昭和58年）　手塚　孝他　二タ俣Ａ遺跡、米沢市教育委員会
八幡堂遺跡

1986（昭和61年）　手塚　孝　米沢の古代文化　まんぎり会

1988（昭和62年）　手塚　孝他　木和田館跡　米沢市教育委員会

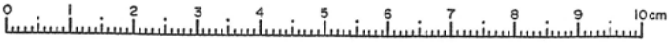
1988（昭和63年）　手塚　孝　比丘尼平　米沢市教育委員会

1992（平成４年）　手塚　孝　「懐風」17号
米沢盆地における中世考古学の諸問題

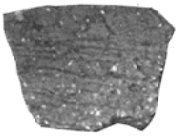
写　真　図　版

1 a

1 b



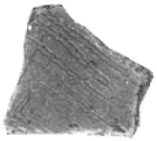
4



2

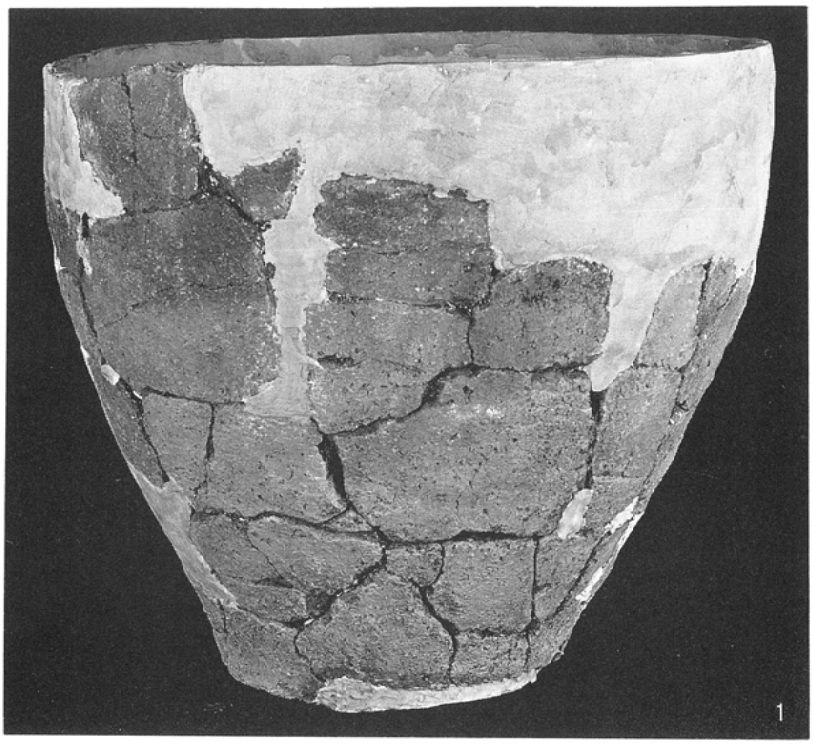
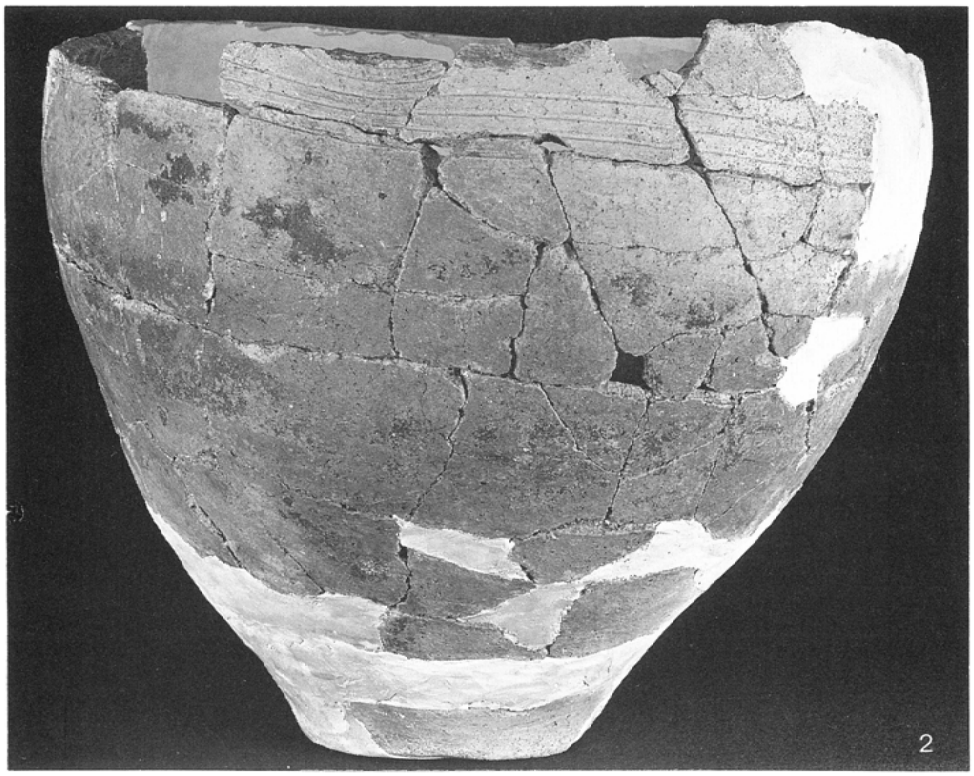
3

5



7

8 a

6

第二図版　上窪遺跡出土遺物